

## 上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

木越治

## 目次

- 一、はじめに
- 二、その意義について
- 三、調査対象
  - ①、富岡本
  - ②、天理卷子本
  - ③、天理冊子本
  - ④、佐藤本春雨草紙
- 四、字母の種類など
- 五、字母別の用法について
  - ①、あ行の仮名
  - ②、か行の仮名
  - ③、さ行の仮名
  - ④、た行の仮名
  - ⑤、な行の仮名
  - ⑥、は行の仮名
  - ⑦、ま行の仮名
  - ⑧、や行の仮名
  - ⑨、ら行の仮名

## ⑩、わ行の仮名

## 六、歌学書・仮名遣書の記述との関係

## 一、はじめに

本稿は現存する上田秋成自筆『春雨物語』全稿本における仮名字母の用法に関する包括的な調査報告である。

こうした調査を思い立った動機については、すでに、拙稿「富岡本『春雨物語』における仮名字母の用法について」(北陸古典研究第2号 昭和62年9月)に記したところであるが、要するに、天理冊子本『春雨物語』の翻刻をきっかけとして、秋成の自筆稿本をくわしく比較検討していくという作業を続けていく過程で、秋成が通常の版本や写本類には見られない字母を時折使用していること、及び、いくつかの字母に関しては用法上のかたよりがみられるらしいことに気づいたことなどが直接の動機となっている。

と同時に、こうした調査が同じ頃から使い始めていたパーソナル・コンピュータを国文学の研究に取り入れるためのモデルケースとしてきわめてふさわしいものと考えられたという点も大きな要素

を占めている。

そうして得られた調査結果の一部は、先に挙げた拙稿「富岡本『春雨物語』における仮名字母の用法について」や「秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について」（日本近世文学会一九八七年度秋季大会における研究発表、於松蔭女子短期大学）などで発表したが、本稿はそれらをふまえ、基本データ等も再検討のうえ、その最終的な調査結果として提出するものである。

## 一、その意義について

古典文学作品に関する文字あるいは単語レベルでの研究は数多く存在している。しかし、字母レベルでの研究は比較的近年のことに属するようで、定家をはじめ中世までの作家・作品についてはいくつか例がある（巻末の文献一覧を参照のこと）。近世のものでも包括的なものは少ないが、近松をはじめ数人については行なわれている。いずれも主として国語学的な関心によって行なわれており、本稿の第一の意義もまた、上田秋成という作者における仮名字母使用の実態を記述している点に求められるであろう。

ただ、従来から上田秋成の作品をどう読むか、ということを中心にして研究を進めてきた私自身の内的必然性からいえば、本稿もまた、純粹に国語学的な研究というよりもむしろ、これまでの『春雨物語』研究の延長上にあるものとして読まれることを期待したのである。

とはいえ、私の場合は、たとえば表・後藤両氏が世阿弥自筆本の

仮名字母（字体）の頻度や用法を詳しく研究し、その結果を存疑本についての自筆・他筆を決定する有力な根拠として援用している（文献⑥）とき明確な目的意識があったというわけではない。当初は、得られた結果をもとに秋成の文字レベルでの表記意識から出発し、さらに文体上の問題やひろく文学全般の問題へと広げていくことができるのではないかと漠然と考えていたのであるが、しかし、調査が進むにつれて、それは甘すぎる考えであることがわかってきた。すなわち、判明した個々の事実をどのように意味づけるか、——たとえば、ある特定の字母について特徴的な用法が見られたとして、それが秋成に固有の用法と断言していいのか、そうではなく一般にもみられるありふれた現象であるのか、さらには、時代的な問題や筆者の教養の質の問題（国学畑の人と漢学系の人とは仮名文字に対する意識も当然異なつてこよう）とどの程度関連しているか等々について、ある程度の見通しが得られないことには、そこから先へ問題を発展させていけないことがわかってきたのである。そして、いうまでもないことだが、こうした問題に一応の見通しを与えるだけでも膨大な量の調査が必要であり、それは個人の努力の範囲を超えているのである。その意味で、当面は今後のこの方面の研究の成熟を期待するしかない状態であり、当初の目論見は放棄せざるをえなかったのであるが、とりあえず秋成自筆の『春雨物語』に限定して調査結果を提出し、それと関連資料とのからみで可能な推定を述べる程度であつてもながしかの意味はあると考え、本稿をまとめることにしたのである。

ただ、この調査の副次的な産物として『春雨物語』本文の詳細な

見直しと従来の翻字本文の再検討の必要性を痛感したこと（その一端は前記北陸古典研究第2号掲載の拙稿でも触れた）は貴重な体験であったし、また、作業の過程で作成した『春雨物語』の本文データや索引資料などは、今後の秋成の文体的特質の解明のための基本資料となってくれるはずである。その意味で、当初から抱いていた「言葉」のレベルから『春雨物語』の特質を解明したいという私自身の願いを放棄したつもりは毛頭なく、今後、これらの資料を利用しながら、角度を変えて研究していくつもりである。本稿を、その最初の試行錯誤の記録としてお読みいただければ幸いに思う。

### 三、調査対象

まず、調査対象とした秋成自筆の春雨物語の諸稿本について簡単に述べる（詳しくは文献⑩の拙稿を参照のこと）。

#### ① 富岡本

天理図書館所蔵。『天理図書館善本叢書 秋成自筆本集』（八木書店 昭和50年7月刊）にこの稿本の全部、すなわち「序文」「血かたびら」「天津処女」「海賊」「目ひとつの神」「樊噲上」の計五巻の影印が収録されている。今回の調査ではすべてこれを利用した。

なお、これは以下すべての稿本についていえることだが、本文を表示するにあたっては原則として底本の一行をデータの一単位として掲出している。また、それぞれの仮名を字母漢字に還元し（ただし、現行の仮名と同一の字母はそのまま仮名で示す）、それ以上の細

かい字体の書き分けは特別の場合を除き考慮外としている。これは、調査に当たってパーソナル・コンピュータを利用したこととも関連するが、より本質的には、同一字母についてくずしの程度によって二ないし三の字体を客観的な基準で区別していく自信がなかったからである。ただ、後述するごとく、「も」「多」「て」など、一字母で用例数が1000以上であるものについては、さらに区別の必要を感じることが多かったが、この点は今回の調査では断念せざるを得なかった。

また、本文を引用するにあたっては、

富岡血か 208-05 て仇うちした《満》ふより十つきの崇神の御  
というふうに、稿本名略号、底本の頁数—行数〈注1〉、本文（特に断わらない限り句読点、濁音符のない翻字本文〈注2〉）をあげ、当該字母へこの場合は「満」の部分だけはもとのままに残して◇で囲んで示す）という順で示してある。また、

タマハリ 富岡海賊 266-04 かけ前の土左守殿のみ舟にたいめた  
《満》

のように、適宜当該字母を含む単語や文節を片仮名の見出し語としてデータの先頭に付することも多い。「」内はミセケチの部分である。また、□は判読不能の部分で、佐藤本などにはかなりあり、富岡本でも「血かたびら」や「天津処女」の巻頭などには手ずれで見えなくなっているところがある。

#### ② 天理卷子本

同じく天理図書館蔵。全部で七篇の作品が残されているが、前出

『秋成自筆本集』に影印が収録されている「死首のゑがほ」「捨石丸」「宮木が塚」「歌のほまれ」「樊噲下」の五編についてはこの本により、ここに収録されていない「二世の縁」「妖尼公」については写真版によった。引用本文の表示方法は前項に準ずるが、「二世の縁」「妖尼公」では底本の写真版の枚数を頁数にあててある。すなわち、「二世の縁」は一葉のみなので頁数として「101」をあて（行数は01→20まで）、「妖尼公」四葉分はそれに続く「102→105」を頁数とし、行数は全79行を01→79として示してある。（注3）

なお、卷子本の「二世の縁」本文は中村幸彦氏『校註春雨物語』（積善館、昭和22年4月刊）および同氏『古典文学大系・上田秋成集』（岩波書店、昭和34年7月刊）補注に翻刻があるが、「妖尼公」の方はこれまで翻刻されたことはない。データ作成の実際を示す意味も含めて、卷子本「妖尼公」の本文作成過程及びその翻字本文を（注4）に示したので参照されたい。

### ③ 天理冊子本

同じく天理図書館所蔵。これは影印が刊行されていないので写真版を利用したが、本文の表示方法に関しては拙稿「天理冊子本春雨物語（翻刻）」（金沢大学教養部論集人文科学編22→2 昭和60年3月）に対応させてある。収録作品は、「序文」の他「血かたじら」「天津処女」「海賊」「二世の縁」「目ひとつの神」「捨石丸」「宮木が塚」「樊噲」「妖尼公」「楠公雨夜かたり」の十編である。このうち、巻末に付されている「妖尼公」「楠公雨夜かたり」の別稿はきわめて口語的な文体で、他の作品とは用語的に異質である点に若干の問題は

残るが、「妖尼公」が卷子本に含まれていることなどを勘案し、この部分も一応調査対象とした。

### ④ 佐藤本春雨物語草紙

酒田市の佐藤三郎氏所蔵。現在は同市の本間美術館に寄託されている。今回の調査にあたってはその写真版を利用したが、引用本文の表示方法に関しては長島弘明氏の「春雨草紙（翻刻）」（読本研究創刊号 昭和62年4月）と対応させるようにした。

ただし、長島氏の翻刻は佐藤三郎氏所蔵の自筆稿本すべてを翻刻の対象としているが、ここでは、『春雨物語』の草稿に属さないと考えられる「長者長屋」以後の部分は対象外とした。「長者長屋」以外に関してはこの処置は支持されると思うが、「長者長屋」を省いたことに関しては若干の説明が必要であろう。この作品は「春雨草紙」が世に知られた昭和十八年当時から『春雨物語』の一編とみなされてきたものだからである。しかし、この作品には長島氏の翻刻にも注記のあるようにはつきりと濁音符がついており、しかも、それは後人の手によるものではなく秋成自身の手になるものと考えられる。のちにくわしく述べるはずだが、秋成は『春雨物語』のすべての稿本において濁音符を使用することはないし、そのために、濁音専用の仮名字母というようなことも検討の対象となってくるのであるが、そうした表記意識からみればこの「長者長屋」は他の『春雨物語』の稿本群とは全く別の表記意識によるものと考えざるをえない。別の言い方をすれば、表記法から見る限り、この作品を『春雨物語』の中に加えるのは適当ではないと判断したということである。

また、作品内容からいっても、この作品をどうしても『春雨物語』の一部と考えなければならぬ積極的な要因は見いだせないと思う。以上の諸点により、「長者長屋」を省くこととしたわけだが、その結果、「佐藤本春雨草紙」として調査対象としたのは「血かたびら」「天津処女」「目ひとつ神」「捨石丸」の四編、計72葉分の草稿ということになる。

#### 四、字母の種類など

表1の最後に作品別・稿本別の字数が出ています。これを見ると、全部で文字数は約6万字、このうち仮名文字は約4万2千字となっている。400字詰め原稿用紙にぎっしり書くと150枚ということになるが、同じ作品の草稿が何種類も含まれているせいもあって内容的にはかなり重複が多い。

さて、表1～5は、使用された字母の種類とその用例数を掲げたものである。1は稿本別の集計だけをひとまとめにしたもの、2～5は稿本・作品別のデータである。

さらに、使用字母の種類をみるための参考データを表6・7に掲げた。秋成以外の人々がどのような字母を使用しているかを、諸文献によって知られる限り集め、一覧表としたものである。

表6は秋成と近世の版本及び古典作品等の例であり、表8は江戸後期の文人達の用法をみるために調査した『ひともと草』（太田南畝編、文化三年序）寄稿者の例である。それぞれよりどころとした資料は次のとおりである。

1、古筆とあるのはいわゆる変体かな辞典等に出ている字母かどうかを見ようとしたもので、ここでは、資料として新潮社の『日本文学大辞典』「平仮名」の項付載の橋本進吉氏作成の「平仮名諸体及び字源表」を用いた。また、万葉仮名に学んだ例もかなりあるので、古典大系の『万葉集一』の解説にある「万葉仮名一覧」によってその有無を記入した。

2、『土佐日記』『更級日記』『平仲物語』『和泉式部日記』の平安朝四作品のデータは、内田保廣氏の好意によっていただいた字母ファイル（作成者は荒井喜久子氏）を利用して得られたものである。フロッピー・ディスクの形で提供していただいたので、以後の字母別の検討においても時折参照させていただいた。なお、データには作品名略号と影印本での所在頁・行（『土佐日記』は青谿書屋本、『更級日記』は藤原定家写本、『平仲物語』は冷泉為相写本、『和泉式部日記』は三条西実隆写本の影印である。頁数は本文1丁を1、1丁ウを2というふうにしてある）を付した。ただ、秋成の調査に時間がかかったため、こちらのデータを充分に使いきれなかったのが心残りである。

3、『篁物語』は文献⑩の平林氏の調査データを使わせていただいた。これは、『小野篁集』『篁物語』甲乙の三種の写本を合計したデータである。

4、『源氏物語』・『徒然草』・世阿弥のデータは文献⑥の表・後藤氏の論文に掲げられているデータを利用させていただいた。世阿弥は自筆本三種の合計のデータ、『源氏物語』は三条西公条写とされる桐壺卷写本の影印本の前中終計15頁分のデータであ

る。『徒然草』は永享三年に正徹が筆写した写本の影印本のやはり前中終計39頁分のデータである。

5、版本として掲げてあるデータは文献④の浜田氏の論文によつたものである。◎は近世後期浄瑠璃本——字種が最も整理された段階にある版本——において用いられたもの、○はそれ以前の段階で用いられたことのある字母である。また、南畝1とあるのは、文献⑤の矢野氏の論文による。『向岡閒話』の調査データである。

6、『ひともと草』関係者の用例は1988年度前期金沢大学文学部における国文学演習において報告されたものをそのまま転載した(この演習に参加した学生諸氏に感謝します)。利用したのは『大東急記念文庫善本叢刊8近世自筆本集』(汲古書院、昭和52年4月刊)所収の影印であるが、個々の調査結果に関しては私自身で再調査は行なっていない。

以上の表を通して考えられることを二、三列挙してみる。

## ①

まず、使用された字母の種類が一・二・九というの、相当に多いといつてよいであろう。ひとりの作者が使用する仮名字母の平均値がどのあたりであるかということは、時代や筆者の問題、作品のジャンル及び写本・版本の違い等複雑な要素が入ってくるからいちがいに言えないだろうが、近世あたりの自筆本ではだいたい七・五・八・六というあたりに収まるようである。古典作品がこれより多いことは当然予想されるところだが、最も多い算物語で一・一・五である。し

かし、この数字も三種の写本の延べ数であるため、個々の写本になると数値はもうすこし低くなるはずである。単独の写本としては『和泉式部日記』が一・一・一、正徹の写した『徒然草』がちょうど一・〇・〇で、他は九・〇台のものが多い。一人の筆者が使用する字母はせいぜいで一・〇・〇前後と思われる。

その意味では、近世後期という、文字史的には収斂の方向に向かつていく時代(文献④参照)にあつて一・二・九もの字母を用いている秋成の文字意識はかなり反時代的なものといえそうである。

## ②

稿本別一覧の表でみるとよくわかるはずだが、稿本によつて使用字母数にかなりのばらつきが見られる。四本を比べると、富岡本が多く、佐藤本になるとかなり少ないのである。これがどういう意味をもつのかはよくわからないのだが、各稿本の性格を考え合わせるならば、清書段階のものには多くの字母が用いられ、佐藤本のように草稿的なものは少ない字母であるということなのであろうか。秋成の他の作品の状況などを調べてみないときちんとした結論が出せないが、とりあえずそんなふうに考えている。

## ③

また、前項とも関連するが、ある字母が特定の稿本にかたよつて用いられているという例も一、二存在する。たとえば、「支」「乎」が冊子本に非常に多く用いられているというのがその顕著な例である。これは個々の字母についての検討においても触れるはずだが、

これもどういう意味をもつかは今のところよくわからない。

## ④

一二九種の字母の中にはかなりめずらしいものも含まれる。個々の字母のところでも述べるが、ここでそれらをまとめて示しておく。

## A、秋成以外に例をみない字母

これに該当するのは、「五」「駝」の二種である。しかも、この二字母は、『秋成遺文』に「史論」と仮題して収められている晩年の文章の正式な書名「遠駝延五登（緒絶琴）」のなかにともに含まれているのである。どういことがヒントになってこういう文字を字母として使用するようになったのかは不明だが、まことに興味深い例である。

## B、万葉仮名に学んだ字母

古筆というか、いわゆる変体かな辞典には出てこない文字で、万葉仮名としての例のある字母としては「迦」「伎」「疑」「自」「治」「杆」「備」の七種があげられる。『金砂』をはじめとする万葉研究書を数冊持つ国学者秋成のことであるから、当然あっていいことだろうが、他の国学者もこれらを字母として用いることがあるのだろうか。このあたりもたいへん興味のもたれるところである。

## C、古筆には例はあるものの比較的珍しい字母

古筆（＝変体かな辞典）及び万葉仮名以外に手元の参照資料に使

用例のない字母としては、「賀」「九」「當」「轉」「傳」「泥」「東」「麻」「理」などがある。もっとも、手元の参照資料にないからといってめずらしいといってしまふのはかなり危険であって、「賀」のごときはたまたま見当らないだけで、古典写本ではよくみかけるものである。だから、この項に関しては、参照程度にみていただければいいと思う。

## 五、字母別にみた用法上の特色について

以下「あゝを」までのそれぞれの字母についてその用法を検討していく。なお以下の記述においては、たとえば、字母「あ」「阿」の両方の仮名をあらわす場合「へあ」の仮名」という表記方法をとる。だから、「か」と表記したときは「可」や「閑」は含まないものとして用いており、これらも含めたいときは「へか」と表記するわけである。

## ①、あ行の仮名

## 1、へあゝの仮名について

へあゝという文字の性格上語頭に用いられるのがほとんどであり、「阿」の200例はすべてそうである（特に存在詞「あり」とその活用形が多い）が、「あ」には

イロアヒ 佐藤目ひ 049-13 させ衣のいろへあゝひにけはひよ  
くして思は

ミアヒ 富岡天津 249-06 見へあゝひたまへりおとろきまと  
ひて遊る

ユアミ 佐藤目ひ 049-09 沼に湯へあゝみしてよしといふ也  
それか中に

ユアミ 富岡樊噲 439-02 さむきほとは湯へあゝみして後に  
出たつへ

ヨアルキ 富岡樊噲 430-03 く夜へあゝるきなれば價先とらす

そとて

のごとく語中の例があった。その点に「あ」と「阿」の違いがあるといえは言えようが、ただ、これらの例も連語的なものが多く、また、「あ」が「阿」の3倍近くの頻度で用いられているわけであるから、単にそうした使用頻度を反映したものともいえるわけで、とりたてて問題にするほどのことではないだろう。

## 2、へえゝの仮名について

ここでは、ただ一例ある

ケエリ 富岡海賊 287-03 成にけへえゝり都にかへりて後に

も

という、片仮名の「エ」を長音に用いた例が注目される。これは、謡曲などの終わり方へ注5をまねたもので、文化五年本も同じく長音になっている。しかし、こちらは三写本とも普通の「え」をあってあり、もし、文化五年本の原本もそうになっていたのだとすれば、富岡本でこのようにわざわざ片仮名の「エ」を使用したということ、は、ややこの長音を強調するような意味あいがあるのではないかと思われる（他にはこういう長音化した「けり」の例はない）。

この他のあ行の文字、へいゝ・へうゝ・へおゝはいずれも字母としては一種しかないのに特に問題とすべきことはない。



## ②、か行の仮名

## 1、〈か〉の仮名について

〈か〉の仮名は「か・可・賀・迦・閑」の5種ある。「可」が圧倒的多数を占め、「か」がそれに続く。まず、「か」と「可」の比較からはじめる。

## A、字母「か」

用法の分布状況は以下のとおりである。

全用例数 452

自立語語頭 228 (50.4%)

同語中語尾 193

付属語 31 (助詞「か」 10、助詞「が」 13、助詞「かし」 1、助詞「から」 3、助動詞「き」の已然形「し

か」 4)

濁音 49 (濁音率へ全用例数で濁音の用例数を割ったものの百分率) 10.8%)

これを次項の「可」とくらべてみる。

## B、字母「可」

全用例数 1554

自立語語頭 250 (16.1%)

同語中語尾 794

付属語 411 (助詞「か」 62、助詞「が」 236、わ

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

「か」は含めない、  
「おのが」 27、「かし」 4、「かな」 2、「から」 4、「がな」 1、「がり」 1、「し」 37、「ばかり」 20、「べからり」 10、「ものから」 7などがある)

濁音 469 (30.1%)

このように対比させてみると、「か」は比較的清音が多く、付属語(助詞「か・が」など)にはあまり用いられないことがわかる。自立語のそれも語頭の例がやや多いという傾向が見られるのだが、これに対し、「可」は濁音の例も多く、付属語や自立語中語尾の例が全体の80%以上を占めているのである。

比較の資料がないので、経験的にいうしかないが、こうした使い分けの傾向は秋成に特殊なものというよりは、割合に一般的なものではないかと思われる。

## C、字母「賀」

この字母は濁音専用と断定していいと思う。全用例を掲げる。

ガ 冊子宮木 54ウ04 ふかき しるしの石は た《賀》

サガ 富岡血か 20302 天皇善柔のさ《賀》にまませれ

ば

サガ 冊子血か 02オ06 《賀》にてまませばはやく春の

宮に御くらむを

サガ 冊子血か 05ウ02 兼ておほしめす御國ゆつりのさ

《賀》にやと

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

四二

サガ 冊子天津 19オ―02 なりし古きためし也と申色好み給  
ふ御さ《賀》

サガ 冊子天津 20オ―05 たまりへりき伴の健宗橋の逸勢等

さ《賀》の上皇諒闇の

スガシク 冊子血か 03ウ―10 いや、す《賀》しくて朝まつり事  
怠らせたまはず

この「賀」は万葉仮名としても《ガ》の濁音仮名とされている。ただ、この字母は一般の写本においても時折見かけることのある字母であり、その場合、特に濁音専用というかたちで用いられることはいはずである。おそらく、秋成は万葉などの古例にならって濁音用として用いたものと思われる。

#### D、字母「迦」

この字母は近世はもちろん古典の写本や古筆などにも用いられた例のないめずらしいものである。おそらく上代の万葉仮名(キ甲類)の例に導かれての使用であると思われる、秋成の学問・教養との関連で興味深い問題を提示している。

以下に全用例を挙げる。

カニカクニ 富岡天津 259―05 し事《迦》にかくに人の

カラクニ 富岡天津 242―06 と申事《迦》ら国にもきかぬた

めし也と申す

カラクニ 冊子天津 17ウ―08 皇御二方《迦》ら國にも聞ぬた

めし

シカ 卷子宮木 364―06 にし迦すれど、又風波あらくは  
いかにせん

用法としては、まず、いずれも清音であること(万葉仮名でも清音の仮名として用いられている)、語頭と語中語尾は3対1であることなどが指摘できる。しかし、それ以上に、「から国」という語に2例用いられており、しかも、これ以外に「から国」という例はないということの方が重要かもしれない。語による字母の選択性は全体としてあまりみられないが、この例などは数少ない例といえよう。

#### E、字母「閑」

これは次の1例のみである。

アカシ 卷子歌の 330―04 と歌は、人丸のほのくくとあ《閑》

しの浦

これだけでは何ともいえない。ただ、秋成には1例しかないが、さきほどの表6・7によれば、版本や和泉式部日記(19例)・平仲物語(16例)・源氏・徒然草などに用例があり、『ひともと草』のなかでも屋代弘賢が用いており、一般的には割合に使用される文字といえる。

#### 3、《へき》の仮名について

##### A、字母「き」

まず、字母「き」全用例の用法分布をみておく。

全用例 713

自立語語頭 63

同語中語尾 || 549

付属語 || 10 (助動詞「き」 || 55、同「べき」 || 46)

濁音 || 74 (濁音率 10.3%)

この分布状況を「支」と比較してみる。

B、字母「支」

全用例 || 252

自立語語頭 || 1

同語中語尾 || 249

付属語 || 2 (助動詞「き」 || 2のみ)

清音 || 200

濁音 || 53 (濁音率 20.9%)

この比較によってもあきらかだが、字母「支」は圧倒的に語中語尾に用いられている。その意味で用法上、顕著な特色のみられる字母であるといえる。なお、くわしく調査したわけではないが、『土佐日記』などでも同様に「支」は語中語尾に用いられる傾向が強いようである。以下、索引ファイル中から唯一の語頭自立語例「きのふ」を含む前後十数例を抽出してみる。

カツキ 富岡樊噲 388-02 て小雨なれは蓑笠かつ《支》てた、

カンナギ 佐藤目ひ 035-08 き神な《支》か手に矛とりてしる

へするさま

カンナギ 冊子目ひ 31オ-04 かなな《支》申す修験はきのふ筑

紫の彦

カンナギ 冊子目ひ 32オ-06 かなな《支》か申せは肩のよわく

てとしこみ

カンナギ 冊子目ひ 35オ-05 あゆむ法師とかんな《支》は人な

り妖

カンナギ 冊子目ひ 37オ-06 て行法師とかんな《支》は人也妖

に

キ 冊子血か 09オ-01 はまんとて先出させたまひ《支》

思ふに過し

キ 富岡天津 256-07 しきく参りたり《支》又時の帝

キノフ 冊子血か 07オ-05 は《支》のふにて衣手さむし宇治

の川波

キヨキ 冊子天津 18オ-06 丸てふあた波をかけても清《支》

名に

キリサキ 冊子捨石 48オ-02 猶立まひて脛のあたりを切さ《支》

たり父の

クチツキ 冊子天津 12ウ-03 のよの又毛をふき疵をと御口つ

《支》

クチツキ 冊子天津 14ウ-08 口つ《支》こはくして國ふりの

歌よむ人は

クチツキ 冊子天津 15オ-03 又毛をふ《支》疵を求むなど、口

つ《支》こはくしく

また、濁音率が 20.9% で、字母「き」と比較すれば多いといえる。これは語中語尾の用例が多いことの反映でもあろう。さらに、この字母「支」に関しては、前にも触れたように、冊子本に極端に

多いこと（全253例中191例で、全体の75.5%）もぜひ指摘しておかねばならない。仮名〈き〉全体に対する「支」の頻度は全体としては25.8%なのに、冊子本の場合は63.3%と過半数を超えており、佐藤本が2.6%の頻度しかないのと対照的である。

別掲の表8「作品別冊子本〈き〉頻度表」を見ればわかるように、こうした傾向は特にどの作品に集中してみられるというでもない。「妖尼公」・「楠公雨夜かたり」がやや低いが、それでも全体の平均以上の頻度なのである。このことがなにを意味するかは早急に結論を得られないのだが、各稿本の性格ともからむ興味深い問題と思われる。

### C、「起」

6例と用例数は少ないが、すべて自立語語中語尾の例ばかりである。清濁については清音5例、濁音1例であった。

イヤシキ	冊子宮木	53ウ	08	高きいやし	《起》	立はしりおのが	どちく
イロヨキ	富岡天津	259	03	色よ	《起》	衣から錦の袈裟	
ソソギ	富岡血か	229	02	に飛走りそ	《起》	て、ぬれく	と乾かず。たけ
ユラメキ	富岡樊噲	391	04	箱のゆらめ	《起》	出て、手足おひ、	
ヨキ	冊子宮木	52オ	06	よ	《起》	とのたまひしかど、たゞ便の	みよ《起》所也

ヲサナキ 富岡海賊 269  
けふに成たる也。海賊は心をさな  
《起》

なお、平安朝四作品について検索してみた結果では、『和泉式部日記』に出る85例のうち自立語語頭は2例のみであった。しかし、『更級日記』に出る1例は自立語語頭「きく（聞く）」に用いられていた。早急に断定はできないが、割合に語中語尾に用いられることの多い字母であるとはいえそうに思う。

### D、「伎」

これも「起」とおなじく3例とも自立語語中語尾の用例ばかりである。ただし、清音1例、濁音2例で濁音例が多い。

が、それよりも、この字母が「迦」と同様、上代の万葉仮名（キ甲類）の例に導かれての使用であるということの方が重要である。全用例をあげておく。

ツラユキ	富岡海賊	263	02	紀の朝臣つらゆ	《伎》	土佐守にて	
カンナギ	富岡樊噲	393	02	しきが中にと	《伎》	せたまへりかんか	五とせの
ミササギ	佐藤血か	011	09	霊かし原のみさ	《伎》	に参りて	

### E、「疑」

これは次の1例のみである。

カキテ 巻子宮木 357  
04 な《疑》てとて宮木を連て一日

この字母も前項と同様、古典の写本や古筆などにも用例のない字

母で、やはり万葉仮名に学んだ用法とみていいはずである。万葉仮名としては「ギ乙類」の濁音仮名であることからみて、1例のみであるが秋成も濁音専用仮名として用いていると思われる。

4、へくゝの仮名について

A、字母「く」

字母「く」の用法の分布は以下のとおりである。

全用例数 960

自立語語頭 198

同語中語尾 749

付属語 13 (「べく」のみ)

濁音 49 (濁音率 5.1%)

全体として、語中語尾清音の例が多く、付属語として用いられることはあまりない文字といえる。

B、字母「九」

14例すべて自立語語中語尾でしかもすべて清音である。その意味では字母「く」にみられた傾向を非常に極端な形で示す字母といえる。

全用例は以下のとおり

カク 富岡樊噲 452 05 しぞ」とて、か《九》里離れた

る所は義皇

カクテ 卷子宮木 356 01 か名付たる。か《九》て河守の

色好み

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

カクテ 卷子宮木 371 04 報へといへどせいし兼たり。か

《九》て在

カヂマクラ 冊子宮木 54 03 名のみなとに よる船の かぢ

ま《九》らして

ツクシ 富岡樊噲 427 01 つ《九》してきて云。「御恩かた

じけなし。いつにても」

ツクシ 富岡樊噲 436 04 つ《九》し九國の間、又伊与・

土佐さぬきに漕

ツクラス 冊子宮木 53 05 せ、翁がこのむ茶箱にもつ《九》

らす。今は人

トク 冊子血か 07 10 妹に、る花としいへばと《九》

きても見てまし

トニカクニ 富岡海賊 270 04 て、とにか《九》に紛れあるく

とぞ。さて問

ニクシ 富岡樊噲 409 08 に《九》し／＼とて追しけど、

足は夷駄天走り

ヒサシク 卷子宮木 355 05 の遊びには、かく宮ひたるは久

し《九》

ワタクシ 冊子妖尼 25 04 したり。天豈わた《九》しに組

せんや。天の長

ワタクシ 冊子妖尼 25 01 人はわたくしもて天をあやし

む。天わた《九》しなく

ワタクシ 冊子妖尼 28 04 神孫又天にわた《九》しして足

利にせはめ

## C、字母「具」

これも濁音専用仮名とみていいであろう。

ササグ 冊子目ひ<sup>32</sup>オ<sup>08</sup> さはらけ七つかさねて御ませに

さ、《具》。

ミクジ 富岡血か<sup>229</sup>07 御みづからおほし立て、み《具》

しおろし、

メグラセ 富岡血か<sup>207</sup>03 め《具》らせ遊ばせたまふ。御製

をうたひあぐ

ヤグラ 冊子海賊<sup>21</sup>ウ<sup>07</sup> 申に。船や《具》らに立て何事を

か申すそと

以上のように4例すべて濁音で、自立語の語中語尾に用いられている。これも、平安朝作品に用例があるが、

平仲 005-02 けゆけは風はいと心ほそくふきて《具》る

平仲 045-05 むさいのいとおもしろく《具》ま／＼しきみるなり

平仲 105-08 とかきていたしけれとものかくへき《具》し

平仲 106-09 ものへおはしにきとて《具》ちをしき物た、ひと

和泉 033-09 《具》せさせよとおはしますめはまた

更級 002-05 《具》しほとけをつくりて、あらひ

更級 005-08 《具》らしつ十七ひのつとめてたつ昔

更級 122-03 まなくあか、むもはしたな《具》

という具合にこちらは8例すべて清音であり、秋成のように濁音専用としては使われていない。「賀」と同様、万葉仮名の用法にひかれたものであろう。

なお、宝暦四年刊の『和字大観鈔』（文雄著）巻下「清濁を混ざる音」の条に

和語の音は、清濁を通じ用ゆ。豆・凶・具・語・度・毗・寿・義の類は、濁音なれども、変じて清音に用ゆるなり。又清音の字を、通じて濁音に用ゆるなり。

という記述がある。これからすると、「具」なども元来は濁音であるという意識を専門家は持っていたようである。

## 4、《へけ》の仮名について

## A、字母「け」

用例の分布状況は以下のとおりである。

全用例数 248

自立語語頭 26 (10.5%)

同語中語尾 165

付属語 57 (「けら、けり、ける、けれ、けえり、けらく」「けん」「げな」「べけれ」)

濁音 52 (濁音率 21.0%)

以上により、自立語語頭にはあまり用いられることがない字母であることがわかる。

## B、字母「个」

全用例数 161

自立語語頭 23 (14.2%)

同語中語尾 80

付属語 || 58 (「けらし」 || 1「けら、けり、ける、けれ」 || 4  
7、「けん」 || 8、「べけれ」 || 2)

清音 || 150

濁音 || 11 (6.8%)

「け」と比較するとやや自立語語頭の例が多いようだが、全体の傾向はそれほど変わらない。濁音の例として「修げん」3例が「介」に偏っているのが目につくが、他の語は「け・介」両者にまたがるものがほとんどで、これは自立語語頭の例も同様である。だから、単語によっての使い分けということもあるとはいえない。むしろ、両者の比較で注目すべきは「支」の場合とは逆に、冊子本の頻度が低いことであろう。

### C、字母「希」

29例のうち、助動詞「けり」が1例ある他はすべて語中語尾の用例である。

アサケ 佐藤血か 011-02 のおほんたからかにけさの朝《希》  
イケ 冊子目ひ 29-07 ほとけをいのりて行《希》と別の  
かなしけにも  
イヒツケ 佐藤目ひ 065-02 夜伽してくる、也といひつ《希》  
かしこ  
オイシケ 富岡樊噲 409-08 にくしくとて追し《希》と足は  
夷駄天走り  
カケリ 佐藤目ひ 045-12 山伏かたれと云に山海を飛か《希》  
りて

カゲ 富岡目ひ 298-02 た覧には花のか《希》の山かつよ  
と人の云はか  
カラハケ 佐藤血か 004-05 このませたまはねと御かはら《希》  
三度とらせた  
カラハケ 佐藤血か 007-03 めせは先かはら《希》とらせたま  
へり栗栖  
カラハケ 佐藤目ひ 038-05 也檜扇とり収めてかはら《希》さ、  
け参る  
カラハケ 冊子目ひ 32-07 かはら《希》とらせてのめとおほ  
す是を  
カラハケ 富岡血か 207-05 は霜結はねは朕わかぬ也御かはら  
《希》とら  
カラハケ 富岡目ひ 314-01 とて喜ふかはら《希》幾回か巡ら  
せたれ  
カラゲ 富岡樊噲 411-04 衣から《希》上て又追ふ谷わたる  
所にて  
ケリ 卷子宮木 345-02 しのみまさり《希》り母は稚きを  
サケ 佐藤目ひ 062-06 へき事よ危きにあたりては避《希》  
ササゲ 富岡血か 210-03 さ、《希》まつらす何の御心とも  
誰つたふへき  
タケク 佐藤目ひ 035-07 物かたりにせんとた《希》くこか  
したり背たか  
タスケ 卷子捨石 320-01 ま、に申させて命たす《希》我も

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

四八

- タユケ 佐藤目ひ 038 03 ましけん兎と猿か肩たゆ《希》に  
大なる
- ツケテ 富岡血か 217 02 まいらす所につ《希》てよめとお  
ほせたうふ薬子
- ナケ 富岡血か 207 04 る其歌棹鹿はよるこそ来な《希》  
おく露
- ネヂケ 富岡血か 218 07 それは二おもてにて心ねち《希》  
たる人に
- ハタケ 卷子捨石 326 06 おとろきて目口はた《希》手を  
マケ 卷子宮木 374 05 はかきに齡ま《希》たりき君もよ  
き舟
- マケ 佐藤目ひ 048 14 ま《希》しと立ふるまへと舌たみ  
て物云
- ユケ 卷子樊噲 458 01 酒代においてゆ《希》と云ふとこ  
ろの物は
- ユケ 佐藤目ひ 064 07 馴てゆ《希》足はおのれか奴僕な  
り
- ユケ 富岡樊噲 407 01 文にあまりぬへしもてゆ《希》と  
櫃のふた
- ユケ 富岡樊噲 450 03 ゆき「《希》」は手まさくりせぬ故  
也されと僧か
- 字母「け」で述べたように全体として自立語の語頭にくることは  
あまりない文字ではあるが、このようにほとんどが語中語尾である  
というのはいはり特筆に値しよう。
- なお、濁音は4例(濁音率11.3. 8%)で、割合としては「け」  
の中間である。
- D、字母「遣」
- これも11例すべてが語中語尾の自立語である。
- カケシ 富岡樊噲 397 07 いと早しされとよんへの神の翅に  
か《遣》し
- カハラケ 卷子血か 03 07 御かはら《遣》とらせたまひり菓  
子扇とりて立
- カラハケ 冊子妖尼 27 06 先とてかはら《遣》をす、めて数  
巡にいたる
- カハラケ 富岡血か 212 04 に御なやみ無し御かはら《遣》参  
る栗栖
- カラゲシ 富岡樊噲 407 02 する内を見ればから《遣》し銭二  
十貫
- カラゲテ 佐藤目ひ 061 05 のともし火から《遣》て汐なき油  
をさつき
- ササゲ 富岡海賊 264 03 酒よき物さ、《遣》きて哥よみか  
はすねくする
- タケキ 富岡血か 229 02 に飛走りそ、きてぬれくと乾か  
すた《遣》
- ナケ 佐藤血か 015 08 よるこそ来鳴《遣》おく露は霜



ユケバ 佐藤目ひ 030-03 山ゆ《遣》は緑の林海ゆけはしら

波立騒

濁音は3例(27.3%)であった。

以上、〈へけ〉の四種の仮名の用法の検討を通していえることは

- 1、全体としての語頭の例は少ないが、用いられる場合は「け」に限定されている。
- 2、付属語の「けり」も同様で、「希」が1例ある他はすべて「け」に限定されている。
- 3、「希・遣」は語中語尾の自立語専用字母として用いられる等の諸点である。

5、〈へけ〉の仮名について

A、字母「こ」

「こ」の用法分布は次のとおりである。

全用例数 646

自立語語頭 356 (55.1%)

同語中語尾 229

付属語 61 (「こそ」 58、「こと」 3、「ことく」 1)

濁音 27 (4.2%)

B、字母「古」

前項の分布状況を「古」と比較してみる。

全用例数 42

自立語語頭 30 (71.4%)

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

同語中語尾 11

付属語 1 (「こそ」)

濁音 0

両者を比較すると、〈へけ〉とは対照的に、全体として語頭にくる率の高い仮名であるが、それでも、「古」の場合はかなり語頭に偏っているといえる。また、清濁に関しても、〈へけ〉自体濁音に用いられることの少ない仮名ということはあるが、「古」の用例がすべて清音であるというのは大きな特色である。このあたりは、次項「五」のような濁音専用仮名の存在とも関係があるろう。

「古」の全用例を挙げておく。

イコマ 卷子二世 101-05 末の夏になりしよはい《古》まの

山もみ

イコマ 卷子二世 101-08 定介にかはりてよむい《古》ま山

イヅコ 卷子宮木 357-01 初め野山のかかめよしいつ《古》

にも率を物共

イヅコ 富岡樊噲 393-06 ゆみくるか見とかめていつ《古》

よりの神

カシコ 佐藤血か 013-07 あはせてこ、かし《古》の神社大

□□

カシコ 富岡血か 206-02 をけからはしとて山深くこ、かし

《古》に住て

コキマゼ 富岡血か 211-01 堅樹の枝に色《古》きませてとり

掛たる神

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

- ココ 佐藤天津 026-07 かきなんこれか小町か《古》、に在て
- ココ 冊子海賊 21-04 名残をしみて《古》、かしの津、浦、に進て
- ココ 冊子海賊 21-09 《古》、に来て船中みなやすき思ひしたり
- ココ 冊子血か 08-01 《古》、と定たまひしをせんたいのいかさまにおほし
- ココ 冊子天津 20-11 《古》、かしこにあるきて初瀬寺の局
- ココ 冊子樊噲 38-01 けふは午時より《古》、にあつまり来る雨
- ココ 冊子樊噲 38-05 あやしと咎めたり大願の候てこよひは《古》、に
- ココ 冊子樊噲 41-09 三なるへしとて目くはせしかは《古》、をのかれて
- ココ 冊子楠公 45-03 此さわきに群狙は《古》、かしたこと逃る物共
- ココ 富岡海賊 264-02 く出舟のほとも人、《古》、かしく追来て
- ココ 富岡海賊 265-06 られぬ事のあるそ悲しき《古》、いつみの國と
- ココ 富岡海賊 268-04 て《古》、まで来たたるは何事と、はせたま
- ココ 富岡血か 205-06 合せて《古》、かしの神やしろ大てらの御使
- ココ 富岡血か 222-04 の蟹かみつくは《古》、も近きかとそくすり子
- ココ 富岡天津 254-04 笠に身をやつして《古》、かしこ行ひ
- ココ 富岡天津 256-05 内つ国の《古》、かしこにす行し
- ココ 富岡目ひ 301-01 たる處あり枕は《古》、にも定む。おひし
- ココ 富岡目ひ 301-07 しき眠りにつかんとすあやし《古》、に
- ココ 富岡目ひ 314-07 《古》、に在てむなしからんやとてわかき男
- ココ 富岡樊噲 417-03 長崎の津にさまよひ来たりしか《古》、に
- ココロザ 富岡目ひ 313-06 せたまへは都にはあすと《古》、ろさしたれと上
- ココヘ 富岡樊噲 413-06 しつみえてあからす《古》、へくて死たり
- コソ 富岡海賊 291-06 ねは目いたく《古》、そあれ名は父の
- コゾリテ 富岡海賊 264-08 舟の中の人、《古》、そりてわたの底を拌み

コト 富岡海賊 274-02 《古》と、よむより他無し言のは  
ことは

コトワリ 富岡海賊 272-06 《古》とわり足すそのかみの人わ  
つかに

コフ 富岡焚燐 407-07 入よとて《古》ふつらにくしきて  
もく

コボレ 富岡焚燐 396-02 物のはらくと《古》ほれしに御  
戸たて、

コメ 富岡血か 227-05 家におろさせて《古》めをらす又  
御子の

コメラレ 富岡天津 245-08 に老ゆくまで《古》められはてた  
まひき國

コヨヒ 富岡天津 245-06 小町も《古》よひ局して念しあか  
すに

コヨヒ 富岡焚燐 428-07 《古》よひこ、過るたひ人あり馬  
に荷おもく負

コレ 富岡天津 257-01 遍昭と名は改たりき《古》れも

ミコシチ 富岡焚燐 455-05 人目多ければとて此冬はみ《古》  
し

ミコト 佐藤血か 009-03 天おし國高日子のみ《古》と開初  
より

C、字母「五」

3例ともに濁音であることからみて濁音専用仮名とみてさしつか

えないであろう。  
用例は以下のとおり。

オオトノゴモル 冊子血か 05ウ-07 大との《五》もらせたまひ  
ぬ。空海あしたまるる。

スゴク 佐藤目ひ 036-03 をらひ声物す《五》く奏す。  
殿の戸あら、

マツリゴト 富岡血か 208-01 しく、朝まつり《五》と怠  
らせ給はず。太弟の

この字母は、近世・古典写本はもちろん、古筆類や万葉仮名にも  
例がない。「九」「三(『ミ』)」「八(『ハ』)」など、漢数字を字母に用  
いる例は少なくないので、その延長で用いたものであろうが、それ  
にしてもめずらしい用法である。すでに述べたように晩年のいわゆ  
る「史論」の正式な書名「遠駝延五登」との関連もあつてまことに  
興味深い字母である。

③、さ行の仮名

1、《さ》の仮名について

A、字母「さ」

用例の分布状況は次のとおりである。

全用例数 724

自立語語頭 239 (32.9%)

同語中語尾 351

付属語 134 (「させ」 97、「さへ」 15、「さる(いい

さる) || 1, さり(ざる, ざれ) || 14)  
濁音 || 74 (10.2%)  
これを次項「佐」と比較してみる。

## B、字母「佐」

全用例数 || 97

自立語語頭 || 74 (76.3%)

同語中語尾 || 23

付属語 || 0

濁音 || 3 (3.1%)

両者の比較によって字母「佐」の性格がはっきりしてくる。すなわち、「佐」は、「さ」に対して

1、四分の三以上が自立語語頭に用いられる。使役の助動詞「さす」や打ち消しの助動詞「ず」の活用形などの付属語には用いられない。

2、濁音として用いられることも比較的少ない方である。

というような特色を持っていることがわかる。

## 2、へしゝの仮名について

## A、字母「し」

「し」は用例数が2000を超え、かつ、「の」「て」などのように助詞に圧倒的多数の用例が集中するというわけでもないので、分布状況を調べるのはそれほど容易ではない。用例をみると、へすゝの場合と同様、サ変動詞にかかわる例が多い。ただ、これらを語頭と

みるか複合語として語中語尾の例とみるかはいろいろ問題があるところであり、私の手元の索引ファイルもそのあたりはきちんとした基準のないままに作成されている。ただ、ここでは、字母「志」と比較するためのデータさえ得られればいいのであるから、サ変動詞以外の自立語語頭の例と濁音例だけの分布状況を見ておくことにする。

全用例数 || 2241

自立語語頭 || 179 (語例としては「しいて」「しかじか」「した」「しめす」「しる」「しるべ」などがある。8.0%)

濁音 || 124 (語例としては、「じ・じゃ・まじ」「あるじ・はじめ・かたじけなし・おなじ・けじめ・すさまじ・ひじり・本じゃう」など、5.5%)

この数字から、「し」の大部分は自立語語中語尾・サ変動詞・助動詞「き」の活用形「し・しか」等で占められていることがわかる。

## B、字母「志」

全用例数 || 188

自立語語頭 || 136 (前項と同じくサ変動詞関係は除く、72.3%)

濁音 || 0

前項の「き」と比べると非常にきわだった特色を持っているといえよう。前項との比較のためサ変動詞はすべて除いても自立語語頭の例が70%以上を占め、しかも濁音の例が一つもないのである。もともと濁音の少ない仮名ではあるが、これはかなり極端なかたよ

り方といえる。それともうひとつ興味深いのは冊子本52例中、序文の「おもしろ」という例以外はほとんど語頭（3例のサ変動詞を含む）の例になっていることである。

「支」の頻度数をはじめ、何度か冊子本の特色らしきものを折に触れ指摘してきたが、ここも、そうした一例に数えていいかもしれない。

### C、字母「自」

これは、1例のみである。

ジ 富岡血か 203-7 け鳴なる鹿の其聲を聞ずはゆか《自》

古典写本や古筆には見られない字母であるが、万葉仮名には《自》の仮名として用いられているので、秋成もそれに倣って濁音専用仮名として使用したものと思われる。

### 3、《す》の仮名について

#### A、字母「す」

「す」の用法分布は次のとおりである。

全用例数 478

自立語語頭 158（「〜んとす」や一部の漢語+「す」の形を含む。これを省くと138、32・9ないし28・9%）

同語中語尾 293（「まゐらす」などの使役動詞はすべて一語とした。また、サ変動詞の多くもこちらに加えてある。）

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

付属語 27（打消しの助動詞「ず」のみ）

濁音 33（6・9%）

濁音が一割以下、自立語語頭も三割程度というのが大体の傾向である。これを、他の「春」「須」と比較してみる。

#### B、字母「春」

全用例数 273

自立語語頭 11（4・0%）

同語中語尾 27

付属語 235（すべて「ず」）（86・1%）

濁音 242（88・6%）

これは秋成の使用字母のなかでもきわめてはっきりとした特色をもつ字母のひとつである。90%近くが濁音用として使用されているわけだが、これまで濁音専用仮名として取り上げてきたものは、いずれも10例以下のものであり、100以上の用例をもつ字母の多くは、二者を比較したうえで若干のかたよりを指摘できても、その字母自体がこのように偏りを示すものはなかったといつてよい。その意味で、この「春」の場合は300近い用例がありながら、このようにはっきりした偏りをみせているわけで大変珍しい例といえる。

平安朝作品にも多くの例（計172例）があるが、『平仲物語』と『和泉式部日記』からそれぞれ5例を引いてみる。

平仲 051-05 もしきてとりもや《春》るとてはなのなかに

平仲 082-09 あつまの、あつまやに《春》んもの、ふや

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

五四

平仲 095-01 露うつるもみち、ら《春》はあきまでと

平仲 114-07 なかゝりして《春》こしもこそおくるれとをやの

平仲 116-03 りけり《春》りやうなとむすめにそありける

和泉 001-06 はれとなかむるほとにちかき《春》いかいの

和泉 001-07 もとに人のけはひ《春》れはたれならんと

和泉 002-01 おもふをなといは《春》れはそのこと、

和泉 004-07 こゑはかはらぬものとしら《春》や

和泉 004-09 人にいふな《春》きかまじきやうなりとて

これだけでも、秋成のように濁音にかたよって用いられていないことがわかると思う。

また、南畝の場合も、矢野氏の調査によると、「春」92例中助動詞「ず」の例は4例で、自立語の語頭（当然清音である）に使うのが標準的であるという。ふつうの版本でも秋成のような使い方はしないはずで、これらによっても秋成の用法の特異さが裏付けられるであろう。

なお、この「春」の自立語語中語尾濁音の例をみると

タタズマヒ 卷子歌の 334-03 もあらず浦山のと、《春》まひ

花鳥の

タタズマヒ 卷子歌の 335-06 心のま、に又浦山のと、《春》

まひ花

タタズマヒ 冊子血か 067-07 都にうつりはてねは故さともあ

らぬたた《春》ま

タタズマヒ 富岡血か 220-06 故さともあらぬた、《春》まひ

也東大寺の

タタズミシ 富岡樊噲 431-05 山立はこ、よしとて木むらの陰

にた、《春》みし

ムズ 冊子妖尼 27ウ-03 に成てむ《春》とくむ是はく

といふほとに

となっていて、「たたずまひ」「たたずみ」という語にはすべてこの「春」が用いられていることが注目される。おなじ自立語語中語尾濁音の例を「す」「須」についてみると、「す」の方は、

アシズリ 冊子楠公 44ウ-07 かたらはんとてふたつのはさみ

八つの足《す》りして

アナズミ 冊子楠公 43オ-09 穴《す》みする蟹の翁あり或時

にさる丸

カンズ 佐藤血か 008-04 感《す》皇太弟神野につかふる

人は僧も

カンズル 佐藤目ひ 043-03 感《す》るのみ書を讀ていにし

へをかへり

の四例であり、「須」の方には自立語語中語尾濁音の例はない。ただ、語頭清音や語中語尾清音の場合はこうした語による字母のかたよりは見られないようであるから、「たたずまひ」「たたずみ」に限っての書き癖のようなものとみるべきであろう。

C、字母「須」

全用例数 50

自立語語頭 12 (24%)

同語中語尾 31

付属語 7 (「ず」)

濁音 7 (「ず」、14%)

前項ほどはつきりしたかたよりは見られないが、「ず」「春」二者との比較でいえば、語中語尾の清音に用いられる割合の多い字母といえよう。

#### 4、へせんの仮名について

A、字母「せ」

全用例数は619である。ただ、この字母に関しては、特に自立語・付属語の判断に迷うことが多いので——というのは、使役の動詞など一語とするか分割するか、また、サ変動詞を上漢語などと連続させるか、独立して取り出すかなど——、語頭の例としてはサ変動詞関連の例を省いて数えることにする。そうすると30例となり、語としては「せかる」「せいす」「せちみ」「せはだかる」「せばむ」「せばし」「せまる」「せめる」「せんだい」「せに」などがあげられる。

他をすべて語中語尾ないし付属語としてしまうのもいささか乱暴であるが、次項「勢」との比較ではこの分布はたいして問題にならないので、これ以上厳密な区別はしないでおく。

また、濁音は11例(1.8%)、「せに」「遍せうかんがう」「こさませ」以外は、サ変動詞の濁音化したものであった。

B、字母「勢」

まず全8例をあげてみる。

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

サセ 冊子血か 03オ01 さ《勢》たいまつる。又参議大臣

の臣たちはか

サセ 冊子天津 19オ06 ばやとしかまへたまひしかど、詠

めすてさ《勢》

サセ 佐藤天津 027 13 弟は入道せさ《勢》けり

ナラセ 卷子宮木 343 01 わび泣して、ついに空しくなら

《勢》

ナラセ 富岡血か 206 05 すがくしくなら《勢》たまひし

かば、猶参

メグラセ 富岡血か 207 03 めぐらら《勢》遊ばせたまふ。御

製をうたひあぐ

ヤラセ 富岡天津 234 07 嵯峨のみかどもおぼしやら《勢》

て、御弟の大

ヨマセ 富岡血か 216 05 よま《勢》給へる。もの、ふよ此

橋板のたひら

すべて語中語尾、というより助動詞「す・さす」の活用形である。また、すべて清音である。しかし、前項の検討からもわかるとおり、この《へせ》という仮名自体、濁音例が少なく、しかも「す・さす」の活用形にかかわる例が大部分を占めるという事情があるので、この「勢」ではそうした傾向が極端な形であらわれているものと理解すべきである。また、平安朝作品の例をあたってみても、語頭の例はほとんどないようである。「勢」が語中語尾ないし付属語の清音に用いられるというのは一般的にいえることのようにである。

なお、《へせ》の仮名字母は一種類しかないので、ここでの検討対象

とはならない。

#### ④、た行の仮名

##### 1、へたぐの仮名について

###### A、字母「多」

まず、最も用例数の多い「多」の用法分布からみていく。

全用例数 1999

自立語語頭 1291 (64.5%)

同語中語尾 260

付属語 449 (「たり・たい・たら・たる・たれ」と口語形の「た」)

濁音 126 (6.3%)

助動詞「たり」などの例が多いのは当然として、それ以上に自立語語頭にくる率の高い文字であることがわかる。

この分布を「た」と比較してみる。

###### B、字母「た」

全用例数 66

自立語語頭 33 (50%)

同語中語尾 18

付属語 15

濁音 3 (4.5%)

分布状況は「多」とあまり変わりがない。語頭率は「多」よりも

低いくらいで、とりたててこの字母としての特色があるようには思われない。

###### C、字母「堂」

全用例数 15

自立語語頭 7 (46.7%)

同語中語尾 7

付属語 1

濁音 1 (6.7%)

この場合も「た」と同じく、語頭率・濁音率ともにきわだった特色を見出しがたい。

###### D、字母「當」

これは次の1例のみである。

マダ 卷子宮木 363-04 言荒く云の、しりて入ぬ。花はま〔當〕

盛

字母としては古筆に例があるようだが、それほどありふれた文字でもないようで、手元の対照資料には使用例がない。また、万葉仮名としては音仮名とはいえないようなので、秋成の場合、濁音専用仮名として用いたかどうかはこの1例だけでは決定しかねるところである。

###### E、字母「駝」

これも次の1例のみである。



ソミカクダ 佐藤目ひ 037-15 名さへ聞く事なし。そみかく《駝》  
は山ゆき

この場合は前項と異なり古筆にも万葉仮名にも用例がない。その意味で「五」とともにきわめてめずらしい字母といえる。「五」の方はそれでも文字としてはありふれているが、この「駝」になると、文字自体きわめてめずらしいものである。その意味で、「五」の項でもふれたように、秋成の著作の書名「遠駝延五登」との関連なども含め、どういふところから得た文字づかいであるのか興味をそそられるところである。

## 2、へちの仮名について

### A、字母「ち」

「ち」の分布状況は次のとおりである。

全用例数 193

自立語語頭 23 (11.9%)

同語中語尾 170

付属語 無し

濁音 13 (6.7%)

他の「地」「治」はいずれも用例が少ない。

### B、字母「地」

3つある用例は次のとおりである。

トヂ 冊子天津 14-09 たゞ口と《地》てそ有ける。上皇

はつか四歳にて

ヲチコチ 富岡血か 223-06 く真魚は、をちこ《地》さまよひ  
て、道にくされた

ヲチコチ 富岡海賊 269-04 りを見聞て、其をちこ《地》ある  
きて、

どれも語中語尾の用例であるが、仮名「へち」は全体として語中語尾に用いられることの多い文字であるから、特色とはいえない。「をちこち」が二例あるのが目を引くが、「ち」の方にも5例あるので、「地」にかたよっているわけではない。定家はこの「地」の仮名を濁音「ヂ」の仮名として用いたという有名な研究があるが(文献①)、秋成の場合はそんなこともないようである。

### C、字母「治」

これは実は用例として採用していいか迷う例の一つである。

ウヂ 冊子血か 07-08 よど瀬なく吾はつかへん世をう《治》な

らで

という1例のみなのであるが、この例は宇治川のほとりで平城天皇の近臣が詠んだ和歌の一節である。「世をうぢならで」という表現はいうまでもなく地名「宇治」との掛詞表現であり、そういうところに用いられた例を、他の例と同様に扱っていいか、やや疑問も残るのである。

字母としても古筆や古典写本にも例のないめずらしいものになるが、万葉仮名では「へち」の濁音仮名として用いられるので、「疑」などと同様、秋成は濁音専用仮名として用いたと考えておきたい。

3、へつゝの仮名について

A、字母「つ」

「つ」の分布状況は次のとおりである。

全用例数 834

自立語語頭 314 (37.6%)

同語中語尾 488

付属語 32 (完了「つ・つる・つれ」 23、「つつ」 9)

濁音 185 (22.2%)

これを「徒」「津」と比較してみる。

B、字母「徒」

全用例数 45例

自立語語頭 39 (86.7%)

同語中語尾 4

付属語 0

濁音 2 (「いたづら」「みやづかへ」、5.1%)

「つ」の用法分布状況からみて、この「徒」の用例は語頭自立語にかたよっており、かつ、清音の例が多いといえる。これも割合に用法上特色のみられる字母である。

全用例をあげておく。

イタツラゴト 富岡海賊 277 03

の部とて五巻まで多かるはい  
た《徒》ら事

ウチツルル

佐藤目ひ 068 04

打《徒》る、也とて金剛杖を腋に

ウツリ

富岡天津 236 06

人の心は花にのみう《徒》栄ゆる物なれ

ツイタチ

富岡血か 226 03

む月の《徒》いたちに、れいのみ菜まいらすに、

ツカフマツリ

冊子天津 187 07

《徒》かふま《つ》りき年毎の豊明の舞

ツカフマツル

富岡海賊 279 07

こそいさ、かもたかへすして《徒》かふま《つ》るを

ツカフル

佐藤血か 008 04

感す皇太弟神野に《徒》かふる人は憎も

ツカヘ

巻子宮木 346 07

よき婿とりして後はよく《徒》かへさせ

ツカヘ

巻子宮木 354 06

《徒》かへよとていそかするさかしくおはせし

ツカヘ

冊子妖尼 257 01

使に海内を治むしかれとも朝に《徒》かへて家

ツカヘ

冊子妖尼 257 01

使に海内を治むしかれとも朝に《徒》かへて家

ツカヘテ

巻子宮木 343 03

に《徒》かへて家ふ家には

ツカラサズ

冊子目ひ 347 03

《徒》からさすしてた、一時にいたらん親

ツキ	冊子捨石 48オ08	《徒》きたりといふあやうき 事なりし先衣	ツツミ	富岡樊噲 45002	《徒》、みたる紙の破たるよ り光きら／＼しくまは
ツギ	富岡血か 20805	て仇うちしたまふより十《徒》 きの崇神の御	ツブテ	冊子楠公 44オ09	りて猶我をも《徒》ふ手打せ んとするに今に心
ツク	佐藤目ひ 03502	ねむ□□は《徒》くへくも□ □古き詩のこゝろ	ツマミ	佐藤目ひ 04515	《徒》まみきはやわらかな らん哥よむ人
ツクラス	冊子宮木 53ウ05	せ翁かこのむ茶箱にも《徒》 くらす今は人	ツヨク	卷子樊噲 45804	手《徒》よくとらへて足にて 横のかたへ蹴
ツクリ	冊子天津 19オ05	さかせて《徒》くりみか、せ たまひ御目う《徒》ら	ツラ	富岡血か 21108	ならず取つきて、左右の大中 将《徒》らを乱して
ツケテ	富岡樊噲 43501	よとて盃二三《つ》《徒》けて かしら髪かきさ	ツラ	冊子目ひ 34オ07	ひて居たり《徒》らは丸くひ らたくて
ツタヘ	卷子歌の 33101	いひ《徒》たへたりけり此時 のみかとは聖	ツラ	富岡樊噲 39805	いた《つ》ら者也にくしとて 《徒》らに唾吐かけて
ツタヘ	冊子天津 19ウ03	《徒》たへたりき帝の五八の 御賀に興	ツラ	富岡樊噲 40005	事也とふもうるさしとて《徒》 らを
ツタヘテ	冊子目ひ 35ウ04	也とそ今も《徒》たへてい《つ》 ちにか蔵	ツラツキ	佐藤目ひ 03907	《徒》き鬼には角なけれどま さにそれそと
ツツシミ	富岡血か 21406	乱おこる。《徒》、しみの怠り にもあらず」と答	ツラツキ	富岡目ひ 31304	しをとり出てしかむ《徒》ら 《つ》きわらへ顔し
ツツシミ	富岡海賊 27704	の《徒》、しみなき也淫奔の事 神代の	ツラナリ	富岡樊噲 41504	尺七寸はかり《徒》ら《つ》 きおに／＼しく
ツツマシウ	卷子宮木 35803	《徒》、まして酒杯し《つ》 かに巡らし有る		卷子捨石 32605	《徒》らなりて地に落たり鬼 法師

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

ツラニクシ	富岡燹噲	407-07	入よとてこふ《徒》らにくし さてもく
ツラヌキ	富岡海賊	291-01	しらるさらは《徒》らぬきと よむへけ
ツラユキ	富岡海賊	263-02	紀の朝臣《徒》らゆき土佐守 にて五とせの
ツラユキ	佐藤目ひ	043-12	さかし《徒》らゆき忠岑に思 たはれて名を
ツルギ	富岡海賊	268-05	へは帯たる《徒》るき取葉て おのか舟
フミノツカサ	冊子血か	13裏-04	いにしへの事ども、ふみのつ ひ
マツリゴト	佐藤血か	009-04	五十一代の大ま《徒》り事聞 しめし
ミヤツカへ	佐藤天津	027-11	あり兄の弘延は宮《徒》かへ せよ

C、字母「津」

全用例数 8

自立語語頭 2 (25%)

同語中語尾 6

付属語 0

濁音 4 (50%)

以下にあげるのが全用例である。

イタヅラ	富岡燹噲	409-04	いた《津》ら心のおこりしぞ とて、をらび声して云。
カヅキ	富岡燹噲	391-02	か《津》きて下りなんとして重 きを
ツトメン	富岡血か	209-02	を《津》とめんとおぼす。一 日、太虚に雲なく
ツヌガノウラ	卷子燹噲	457-02	《津》ぬがの浦のあなひ聞て、 「夜よし」とて月に
フツツカ	富岡目ひ	303-02	ふ《津》、かに見ゆる。是もき つねなりやしろの前に
フツニ	卷子宮木	344-02	ふ《津》にこたへはしたまは ざりき。
マツル	富岡天津	236-01	ひてつかふま《津》るもあり。 民はまいてなりし
ヨロツ	卷子宮木	353-05	ゆきてよろ《津》たのみなん とおぼせど、

ただ、用例が、富岡本と卷子本のそれも「宮木が塚」と「燹噲下」に集中しているのはなかなかおもしろい現象といえる。というの、富岡本と卷子本のこれらの作品は『春雨物語』稿本中最も後に属するものと考えられているからである。

他にも似た例があれば、清書段階での字母選択の傾向として指摘することが可能にならう。

## 4、へての仮名について

へての仮名は使用字母の種類は6種と多いにもかかわらず、字母「て」以外の用例は合計でも13例しかなく、全用例の99%以上が字母「て」の例で占められている。本当は、字母「て」もくずしの度合に応じてもう2、3種に分けることも可能であろうし、それに従って用法を検討してみれば、あるいはそれなりの使い分けがみられたかもしれない。しかし、いまさら、2500の用例いちいちについて検討し直すことも不可能なのでその点はあきらめざるをえなかった。また、「て」以外の5種はいずれも、濁音専用仮名か1例のみの孤立例といえるものばかりなので、「て」の分布状況を参照する必要もあまりない。それゆえ、以下では字母「て」に関して一切考慮せず、「て」以外の5種の字母の用例だけについてみていくことにする。

## A、字母「泥」

以下にあげる6例をみればすぐわかるように濁音専用仮名である。

マデニ	富岡血か 216-06	けくかよひてつかへ萬代ま《泥》
マデ	富岡海賊 268-04	て、こ、ま《泥》来たるは何事と、 はせたまへ回原本は「まで」
イカテ	富岡目ひ 297-05	わたり、いか《泥》、都にのぼりて

歌の道ま

マデ 富岡目ひ 312-06 たやすくは通さず。こ、ま《泥》  
来たる事、

ココマデ 卷子宮木 343-04 かへら《泥》此首細き人にしたか  
ひ

イカテ 冊子血か 11-01 たまへは君は山河をこえていか  
《泥》在せたまは

古典写本や古筆には例をみないが、万葉仮名でもへての濁音仮名として使用されている。不確かな記憶で申し訳ないのだが、寛政文化頃刊行の万葉研究書の序文でこの「泥」を濁音仮名として用いた例を見た記憶がある。参照字母一覧には秋成のみとなっているが、この字母などは国学者にも使用例があると思われる。御教示を得られれば幸いである。

## B、字母「傳」

これも、3例すべて濁音である。

ナラテ	富岡血か 217-08	なら《傳》兵部太輔橘の三継よむ。 妹に
イカテ	富岡目ひ 310-05	ひとり行には、いか《傳》我さす 枝折のほか
メデ	卷子歌の 334-05	写し得がたしとてめ《傳》、はよみ し也

この字母は古筆に例のあるものだが、その場合濁音として用いられることが多いのかどうか、手元の資料だけでは確かめることができない。

## C、字母「帝」

以下3種は、いずれも一例のみである。なかでは、この「帝」が版本や平安朝作品にも例があつて、割合になじみのある字母である。秋成の用例は、次の例で助詞「て」に用いられている。

テ 卷子樊噲 458-04 手つよくとらへ《帝》足にて横のかたへ蹴平安朝作品の例をみても、

ゴラムジテ 和泉 019-11 らむし《帝》たちかへり

ニテ 更級 105-08 《帝》ほとけをいとおほくつくりたてと、得られた2例とも助詞である。また、『ひともと草』寄稿者の中では屋代弘賢が2回用いているが、これも報告者によればやはり助詞「て」の例とのことである。

もともと、仮名「て」の用例のかんりの部分を助詞「て」やその連語形「にて」「して」などが占めているので、このわずかの例から断定することは危険だが、ともかく、手元に集まった例にさういうかたよりの見られることは報告しておきたい。

## D、字母「豆」

これも、1例のみ。用例は以下のとおり。

テ 富岡目ひ 303-07 みだれ《豆》、目ひとつか、やき、口は耳の根

この字母は、古筆に例があり、万葉仮名としても《て》の代表的な清音仮名である。しかし、手元の資料には他に例がないので、これ以上の検討は不可能である。

## E、字母「轉」

これも次の1例のみである。

タテマツル 富岡樊噲 396-01 た《轉》まつるふとのりと言高く申手に

これも古筆には例があるようだが、前二例のように助詞ではなく「たてまつる」という自立語中に用いられている点に興味がもたれる。が、これもこの他に例が得られないのでなんともいえない。

## 5、へとの仮名について

## A、字母「と」

「と」の用法分布は以下のとおりである。

全用例数 || 2328

自立語語頭 || 280 (12.3%)

同語中語尾 || 429

付属語 || 1637 (70.3%)

濁音 || 325 (14%)

これを「刀」「登」と比較してみる。

## B、字母「刀」

全用例数 || 42

自立語語頭 || 0

同語中語尾 || 27

付属語 || 15 (助詞「と」・「と」、35.7%)

濁音 3 (7.1%)

前項の「と」と比較すると助詞の割合も低く、自立語に用いられた例はすべて語中語尾である。濁音も3例と少なく、かなり用法上のかたよりのある字母といえる。全用例を掲げる。

アト	冊子捨石 48オ-01	伝二につるき取をさめさせ てかへるあ《刀》に	ト	冊子海賊 21オ-06	む《刀》思ふほとに日数へ たり又海賊おひ
アト	富岡目ひ 302-03	あ《刀》につきて修験の柿 染の衣肩に	ト	冊子宮木 54オ-06	身のいけりともなし《刀》 朝よひにうらひな
アトベ	冊子血か 04ウ-07	御はか詣たまへり百官百司 みさき追ひあ《刀》へに	ト	冊子血か 05オ-07	いそき鳳輦にて我もく 《刀》よほろのみ
イト	富岡樊噲 389-01	云は足もい《刀》はやしま た日高きに	ト	冊子血か 06オ-05	うなつかせたまひてよし 《刀》のらせたまへ
オト	冊子血か 05オ-03	人音なみて三くさ笛の音 つ、みのお《刀》	ト	冊子血か 06オ-07	漢家は四百年いかにすれば 長し《刀》
オトドヒ	冊子捨石 48オ-11	お《刀》、ひはかたはらに臥 ぬあした目さめ	ト	冊子血か 07オ-04	ありしを咲花のにはふか如 く今さかり也《刀》
ココロモトナカ	冊子捨石 49オ-03	心も《刃》なかりしをと申 捨石はとりくの事	ト	冊子血か 07ウ-04	よめ《刀》のらせたまへり 朝日山にほへる空
サト	富岡樊噲 414-01	一さ《刀》立さうときて追 へと手なみ	ト	冊子血か 08オ-06	なり今つかふまつる臣たち いかて二面ならんよ《刀》
タフトカリ	卷子二世 101-01	す、む事いとたふ《刀》か りけりあるしも	ト	冊子血か 10オ-05	みこ《刀》仰きたいまつり し善柔は損多しと
ト	冊子血か 08ウ-01	こ、《刀》定たまひしをせ んたいのいかさまにおほし	ト	冊子天津 15ウ-07	かは海か筆《刀》しるした り妬くこそおほし

ト	冊子楠公 43ウ-03	にあるをつるく《刀》は ひ下りて蟹か背に	メノト	卷子宮木 352-02	云めの《刀》しか申さんと ていぬ
ト	冊子目ひ 32オ-05	あゆみくるしけに来たると く《刀》いひしにと	メノト	冊子宮木 50オ-02	かはかん崎の津にめの《刀》 かよし有てこに
ド	冊子天津 17ウ-10	紀元を承知とあらためさせ たまへ《刀》	メノト	冊子宮木 50オ-10	なひたまひけり彼めの《刀》 はやもめ住して
フトノリトゴト	富岡樊噲 396-01	たてまつるふ《刀》のりと 言高く申手に	メノト	冊子宮木 51ウ-07	ないたまふめの《刀》云い かにしたまふ
フトノリトゴト	富岡樊噲 396-01	たてまつるふとのり《刀》 言高く申手に	モト	冊子捨石 49ウ-07	小伝二は香取のかんつかさ のも《刀》に在
フルサト	冊子血か 08オ-02	ならずや飛鳥の故さ《刀》 に草香部の	モトヨリ	富岡樊噲 385-04	すみて夜はも《刀》より昼 も申
ホトトギス	富岡血か 212-07	しきよくてそ夜に月出ほ 《刀》、きす一二聲	ヤマト	富岡海賊 273-07	《刀》うたはひとつ心を種 としてよろつ
マコト	冊子天津 16オ-03	是見よまこ《刀》の王義之 か筆也と示させたま	ヨドセ	冊子血か 07ウ-08	よ《刀》瀬なく吾はつかへ ん世をうちならて
マロウド	冊子目ひ 32ウ-03	て修けんまろう《刀》也打 かさねてま			
ミナト	卷子宮木 338-01	みな《刀》、呼し所也けり此 岸より北は			
ミナト	冊子宮木 54オ-03	名のみな《刀》による船の かちまくらして			
メノト	卷子宮木 345-04	おはしけるにめの《刀》か 云かくておは			

C、字母「登」

全用例数 21

自立語語頭 2

同語中語尾 7

付属語 12 (「と・ど」、57.1%)

濁音 9 (42.9%)

全21例中、自立語語頭の例が2例(「とらせ・とられ」)、助詞「と・



ど」が12例で、他の7例は語中語尾の自立語(「いと」「ことごとし」「まつりごと」「めのと」||各1、「されど」||3)である。清濁は濁音9、清音12である。用例数がすくないので、%だけで見るとちがいがるように見えるかも知れないが、実質的には「と」と同様の平均的な分布状態で、「刀」ほどのかたよりはみられない。

#### D、字母「東」

これは次の1例のみである。

トニ 冊子血か<sup>02</sup>ウ<sup>01</sup>きかずはゆかし夜の明ぬ<sup>〇</sup>東<sup>〇</sup>に打傾き  
て

古筆に例がある字母というが、どちらかというところ珍しい方の字母に属するであろう。

#### E、字母「杵」

これも次の1例のみである。

ミカド 冊子血か<sup>04</sup>オ<sup>02</sup>人しらし奏す。みか<sup>〇</sup>杵<sup>〇</sup>独言したま  
へり。皇

この字母は古筆には例がない。万葉仮名では「ト乙類」の濁音仮名なので、秋成はこれにならって使用したものであろう。

#### ⑤、な行の仮名

##### 1、へなゝの仮名について

#### A、字母「な」

「な」の用例分布状況は次のとおりである。

全用例数 || 804

自立語語頭 || 263 (32.7%)

同語中語尾 || 208 (25.8%)

付属語 || 333 (41.4%)

自立語語頭が三分の一、語中語尾が四分の一、残りが付属語(「なり」の活用形が大部分を占め、あとは係助詞「なん」や終助詞「な」など)というのが目安である。

これを「那」と比較してみる

#### B、字母「那」

全用例数 || 33

自立語語頭 || 3

同語中語尾 || 29

付属語 || 1

これを見ると特色がはっきり出ている。すなわち、付属語としての例は、

ナ 富岡樊噲<sup>437</sup>〇<sup>04</sup>金あたへんぬすみす<sup>〇</sup>那<sup>〇</sup>商人にやつして  
という1例のみであり、自立語語頭も3例(「ながめ」||1「なぐさめ」||2)だけで、あとはすべて自立語語中語尾の例である。「な」と比べても、極端に語中語尾例の多い字母である。

残りの例を掲出する。

- アケハナチ 冊子目ひ 30ウ-07 まし神殿の戸あらゝかに明は  
《那》ちて
- アナ 冊子血か 06ウ-06 我につかふと云よあ《那》煩し  
とうそ吹たまへ
- アナウラ 冊子天津 17オ-09 あ《那》うらをたちて大隅の國  
へ適
- ウナツカセ 富岡血か 213-07 わたくしなしとそ打う《那》つ  
かせ給ひてよし〜と
- ウナツカセ 富岡天津 248-06 まひてう《那》つかせたまへり  
きみかと宗貞か
- ウナツク 富岡樊噲 453-07 う《那》つく〜出て足とけれ  
は野こえ
- オコナハレ 冊子目ひ 33オ-03 文よみ物しる事おこ《那》はれ  
す高
- オヨナ 冊子楠公 44オ-01 いふおよ《那》殿何をうまけに  
めさると、へは是はことし
- カナシキ 卷子宮木 375-03 い何にはかりて罪したるよ病は  
か《那》しきもの也
- カナシク 卷子宮木 379-03 たる人よいとか《那》しくあは  
れ也とて
- カナシゲ 冊子目ひ 29オ-07 ほとけをいのりて行けと別のか  
《那》しけにも
- カナタ 冊子宮木 51ウ-09 か《那》たの子と思すには涙と、  
めて出た、し
- ガナ 冊子目ひ 35ウ-01 なひ入て何をか《那》とて日な  
みとり出て
- キタナマロ 冊子天津 18オ-05 可有今日哉足のうらのきた《那》
- コナタ 冊子妖尼 25ウ-08 代と云はかなたに變りこ《那》  
たに代り骨肉嚙
- サカナモノ 佐藤目ひ 038-09 かんはしきか《那》物是かれう  
まし〜とて
- サナガラ 佐藤目ひ 049-18 たふとしき《那》から既に云如  
くあつま語
- スナホ 卷子歌の 336-02 あはれと思ふ事はす《那》ほに  
よみたる
- ソコナハレ 冊子天津 18オ-02 のかた輪の缺そこ《那》はれて  
行んや
- ソナタ 富岡樊噲 443-07 いかにおはすといせはそ《那》  
たの間こぬ
- ソナフ 冊子血か 04ウ-08 そ《那》ふ左右の大臣大将中将  
御車のをち
- ソナヘ 冊子血か 05オ-09 してそ《那》へたり還御たから  
かに申せば
- ソナヘ 冊子樊噲 40ウ-03 たまへ物もとめてそ《那》へ奉  
らんとて母にさき
- ソナヘ 富岡血か 211-09 そ《那》へたり還御たからかに  
申せば大伴の

トナフレ 冊子血か 04-01 と《那》ふれは即地におちて倒

たりあやし

トナリ 佐藤天津 026-01 してをると《那》りのつほねに

ナガメ 富岡血か 216-04 しはしと、めさせて河つらを

《那》かめておほん

ナグサメ 卷子宮木 339-05 たかく立まひ哥よみて人の心を

《那》くき

ナグサメ 冊子天津 19-01 天女あまくたりて《那》くさめ

奉りしそれは五人の乙女

ハナタズ 冊子捨石 47-04 次をも捕へては《那》たすから

うしてのか

ハナチ 卷子捨石 326-04 ふたつひようと引は《那》ちた

れは

マカナハセ 冊子捨石 46-01 財宝も何も一人子の小伝二にま

か《那》はせてこの

2、へにくの仮名について

へにくの仮名はどの字母も助詞・助動詞及び形容詞活用語尾の例がほとんどを占める。それゆえ、ここでは、各字母について自立語の例にどのようなものがあるかを中心にみていく。

A、字母「爾」

全用例数 1645

自立語語頭 11 (「にぎはし」「にへつもの」各1、「にくし」

にくみ 6、「にほふ」3)

同語中語尾 25 (「あに」「いかにも」「うちじに」「ききにく

し」「みにへ」各1、「いにしへ」14、「おにお

にし」各3、「くに」2)

付属語 1609 (「だに」6を含む)

B、字母「耳」

全用例数 363

自立語語頭 0

同語中語尾 1 (「かにかくに」)

付属語 362 (「だに」1を含む)

C、字母「に」

全用例数 306

自立語語頭 33 (「にぎたづ」「にごし」「にし」「にへつもの」

各1、「にぎはし」4、「にくし・にくむ」1

8、「においろ」2、「にほひ」2、「にらみ」

3)

同語中語尾 5 (「いにしへ」「ぜに」「みにへ」各1、「とに

かくに」2)

付属語 268

D、字母「丹」

全用例数 44

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

六八

自立語語頭 〓 2 (「にくし」「にくませ」 〓 各1)

同語中語尾 〓 5 (「いにしへ」「おにおにしく」「ぜに」「とにか

くに」「かにかくに」 〓 各1)

付属語 〓 37

E、字母「ニ」

全用例数 〓 13

自立語語頭 〓 0

同語中語尾 〓 1 (「まにまに」)

付属語 〓 12

こうしてみると、まず「耳」「ニ」が自立語の例にとほしいことは指摘できそうである。しかし、それ以外にたとえば語による字母の選択性の有無をみても、「いにしへ」という語を例にとれば、「爾」に5例とかたよっているとはいえ「に」にも「丹」にも例があつて、ことさら語によって字母が選ばれているともいえないようである。

ただ、先に述べた「耳」「ニ」が自立語(特に語頭)に使われないというのは、秋成だけでなく、他の例にもあてはまるようである。

平安朝四作品に出る「に」「耳」の例は次の35例であるが、どれも付属語「に」の例ばかりである。特に『平仲物語』の「ニ」「耳」は行末にきたときに限られていて、はっきりと用法の限定された字母である。

土佐 069 〓 07 しそぎ 〓 〓 しそきてほとくしく

平仲 010 〓 04 ぬらんとてそのつかさめしのなをし物 〓 〓

平仲 037 〓 02 かう哥もよ見おかしかりけれとまめやか 〓 〓

平仲 038 〓 03 ければ七ひにかはらにゆきてあそひける 〓 〓

平仲 055 〓 03 このおとこなにのよきこと、てもろともに入 〓 〓

平仲 112 〓 09 さいふとにくらうなりにけりなをこ、 〓 〓

平仲 112 〓 11 つねわひつることをよろつにいひかたらひける

〓 〓

平仲 118 〓 08 よさり心もとなければふみやらむとてかくほと

〓 〓

更級 056 〓 05 いみしくゆかしけれとえいひよらぬ 〓 〓

更級 160 〓 07 いらあひのかねの心ほそさ 〓 〓

平仲 002 〓 08 にはましらはてひたみちにおこなひ 〓 〓

平仲 009 〓 01 のたまふおもひわつらひてなからふる 〓 〓

平仲 045 〓 10 しこあれ又わかのちにてもかう心うき人 〓 〓

平仲 048 〓 04 あらめとおもひてさらはよきをりく 〓 〓

平仲 117 〓 03 くやしと思ひなからとかく思ひたる、 〓 〓

和泉 012 〓 06 をなにかこ 〓 〓

和泉 023 〓 04 給てはよきことやはるか、る御とも 〓 〓

和泉 032 〓 03 つらしとも又恋しともさまく 〓 〓

和泉 032 〓 11 やましくもなとなかめられるは宮 〓 〓

和泉 035 〓 07 人のいふほとよりもうめきてあはれ 〓 〓

和泉 041 〓 02 めとかもの思ふ時はとそをろか 〓 〓

和泉 042 〓 08 あるもうちおもへはあさましうか、るほと 〓 〓

和泉 046 〓 06 とてはし 〓 〓

和泉 047 〓 05 いま一たひのあふこと 〓 〓

和泉 052 〓 03 に心くるしけにうちなひきたる 〓 〓

和泉 055-10 おなし心《耳》なかめけるかな

和泉 057-06 うきせ中《耳》しるてこそふれ

和泉 065-11 したるほと《耳》御ふみあり

和泉 068-07 つるといふかをかしうてはし《耳》

和泉 078-05 とてはし《耳》

和泉 091-06 こ、ろく《耳》あらむものかは

和泉 095-06 あはれなることをの給はせちきるあはれ《耳》

和泉 096-11 と思給ふれといか、はとてはし《耳》

和泉 099-09 とのたまはせたる《耳》

和泉 111-06 りと本《耳》

次の《ぬ》の仮名は字母が1種だけなので省略する。

3、《ね》の仮名について

A、字母「ね」

「ね」の分布は次のとおりである。

全用例数 88

自立語語頭 19 (21.6%)

同語中語尾 27 (「まつがね」を含める)

付属語 42 (47.7%)

これを「年」と比較してみる。

B、字母「年」

全用例数 37

自立語語頭 0

同語中語尾 23

付属語 14 (37.8%)

自立語語頭の例はすべて「ね」で、「年」は語中語尾か付属語(「ね年」ともに計56例の付属語はすべて助動詞「ず」の已然形である)に限られる。その意味で、この「年」という字母は、昔の仮名遣書の言い方にしたがえば「上にこない文字」あるいは「下にくる文字」ということになる。全用例を引いておく。

イワネ 佐藤目ひ 043-09 妻あまたもとめて鴨山の岩《年》  
枕にけふ終る

ウネメ 佐藤目ひ 066-13 女房う《年》めは盃はとりをさむ  
修験

カキネ 冊子楠公 43-02 心あしくていてあたへんと大なる  
石の垣《年》

カネ 富岡樊噲 448-04 賈のか《年》ありて春は大坂の戎  
まつりに

カバネ 冊子宮木 53-04 はふりをさめしと也宮木かかは  
《年》は

コガネ 卷子宮木 348-05 のこか《年》見せ奉らんといふ長  
即

コガネ 佐藤捨石 070-02 みちのく山に黄か《年》花さくと  
よみし

コガネ 冊子樊噲 41-100 銭はおもしとて黄か《年》十ひら  
にかへて長崎

コガネ 富岡樊噲 417-01 しとて木のもとに投すて黄か《年》

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

七〇

- サネトモ 卷子妖尼 103-20 朝をいたくさ《年》朝才ありし是  
にはかり事
- サネトモ 卷子妖尼 103-25 ついに好して又さ《年》ともどあ  
しく
- サルマネ 佐藤目ひ 069-08 を守らす守るは猿ま《年》也我  
シカノネ 冊子血か 02オ-100 けさの朝けなくなる「しかの《年》  
さむく鳴」しかの其聲を
- タビネ 佐藤天津 026-05 石のうへに旅《年》はすれは肌  
富岡天津 255-01 もたせてやる石野上に旅《年》は  
すれは
- ツネ 冊子血か 05オ-10 大伴の氏人開門す御つ《年》にあ  
らすとて
- ツボネ 卷子宮木 376-04 御鳥羽のるん上つほ《年》に鈴虫  
松虫とて
- ツボネ 佐藤天津 026-01 してをるとなりのつほ《年》に  
ツリブネ 富岡海賊 266-02 釣ふ《年》かとおほしき木葉のや  
うなるか散
- ネ 卷子宮木 372-06 あら《年》はこたふへくもあらぬ  
を命の限
- ネ 佐藤血か 004-05 このませたまは《年》と御かはら  
け三度とらせた
- ネ 佐藤目ひ 045-02 はあら《年》とよしの花は必雲よ  
雪よと
- ネ 佐藤目ひ 066-05 たをれ《年》ととよめきおこりし  
ほとに
- ネ 冊子血か 03ウ-06 おくつゆの霜にむすは《年》は朕  
わかゆ也
- ネ 冊子血か 07ウ-01 上る網代の波はた、《年》とけふ  
こ、に千代
- ネ 冊子血か 08ウ-07 都にうつりはて《年》は故さとも  
あらぬたたすま
- ネ 冊子目ひ 30ウ-06 夜また深から《年》と物のこたふ  
るやうにてすさ
- ネ 富岡樊噲 455-04 来たり難波の騒かしきには似《年》  
と
- ネ 富岡樊噲 441-01 花の外には黄なる光見《年》はお  
いしいた、き
- ネ 富岡樊噲 425-05 しかとこの比物くは《年》は足た、  
すして道に
- ネ 富岡血か 216-08 見《年》と千代くと鳴鳥は河洲  
に群ゐる
- ネ 富岡海賊 274-07 か任にあつから《年》はよそめつ  
かひて有し
- ネ 富岡海賊 268-07 仇すへき事おほししらせたまは  
《年》は打
- ネ マツガネ 佐藤目ひ 038-11 ほして又参らすあの松か《年》枕  
に空

マツガネ 富岡目ひ 308-02 りさてあの姿か《年》枕して空ね

入したる

マネ 冊子楠公 44-11 は人ま《年》してもよき事はせず

仇打せんと

ミツネ 冊子海賊 23-07 りつきて友則躬つ《年》た、岑に

かたり言

4、《へ》の仮名について

A、字母「の」

「の」の分布は次のとおりである。当然予想されるように助詞「の」が用例の大部分を占める。

全用例数 2478

自立語語頭 97 (3.9%)

同語中語尾 319

付属語の 2029 (助詞「の」 2022 (81.6%)、のみ 40)

B、字母「能」

全用例数 77

自立語語頭 0

同語中語尾 15 または 7

付属語 62 (80.5%) または 70 (90.9%)

分布は以上のとおりであるが、あいまいな書き方をしたのは自立語と付属語の区別がつけにくい例がいくつかあるからである。一応、

自立語として索引ファイルに分類されている15例をまず引いてみる。

アリノママ 卷子捨石 324-08 召捕へて守に引つれ行あり

《能》

オギノリワザ 卷子宮木 352-07 き《能》りわさして今にかへ

さぬそある

コトノハ 富岡海賊 273-08 言《能》葉となれると云しは

文めきたれ

コトノハ 富岡海賊 274-02 こと、よむより他無し言《能》

はことは

タノミ 佐藤目ひ 033-01 根はへる松ありこ、とた《能》

みて笠の緒とき負し

ツヌガノウラ 卷子樊噲 457-02 つぬか《能》浦のあなひ聞て

夜よしとて月に

トトノハ 富岡海賊 272-03 と、《能》はぬかあり草木の

枝葉の風

メノト 卷子宮木 345-04 おはしけるにめ《能》とか云

かくておは

メノト 卷子宮木 50-04 め《能》とか云かくておはさ

はひめ君も我も

メノト 卷子宮木 51-07 ないたまふめ《能》と云いか

にしたまふ

メノト 卷子宮木 51-06 てめ《能》とによくせよと仰

たまひけりやか

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

モノノフ 富岡血か 216-05 よませ給へるも《能》、ふよ此

橋板のたひら

モノノフ 富岡目ひ 309-06 も又も《能》、夫のあら〜し

きも是に欺かれて

ワカノウラ 卷子歌の 330-02 山部の赤人のわか《能》浦に

汐満くれは

ワカノウラ 佐藤目ひ 051-15 にさへ幸と不幸あり赤人か

か《能》

これらのうち、問題なく一語といえるのは「おぎのりわざ」「たのみ」「ととのふ」各1例、「めのと」2例、「もののふ」2例の計7例で残りは連語ないし地名である。だから、それを自立語に含めなければ、字母「能」に占める助詞「の」の割合は90%を越すことになる。その意味では「の」以上に助詞「の」の割合が高い字母といえる。

### ⑥、は行の仮名

#### 1、へはの仮名について

仮名字母を検討するとき、まず目安になるのがこのへはの仮名である。用例数も多く、たいていは3〜4種の字母を持ち、しかも、ある程度の用法上の使い分けが認められることが多いからである。秋成の場合は、「ハ」が最も用例数が多く、ついで「盤」、それよりだいぶ少なくなつて「者」、今日と同じ字母の「は」が最も少ないというのが用例数からみた状況である。

以下、四種の字母の用法分布をまず列挙していく。

#### A、字母「は」

全用例数 || 280

自立語語頭 || 85

同語中語尾 || 171

付属語 || 24 (助詞「は」 || 6、助詞「ば」 || 3 「ばかり」 ||

11、「ばや」 || 4、8、6%)

濁音 || 67 (24.6%)

#### B、字母「ハ」

全用例数 || 913

自立語語頭 || 1 (「はつか」)

同語中語尾 || 72 (濁音は「遊ぶ」「奪ふ」「せばし」「学ぶ」「呼

ぶ」の計8例)

付属語 || 840 (助詞「は」 || 724、「ば」 || 114、「ばや」

|| 2、92%)

濁音 || 123 (13.5%)

#### C、字母「盤」

全用例数 || 629

自立語語頭 || 1 (「わらはめ」)

同語中語尾 || 0

付属語 || 628 (助詞「は」 || 340、「ば」 || 289、99.

8%)



濁音 || 285 (45.3%)

D、字母「者」

全用例数 || 295

自立語語頭 || 109

同語中語尾 || 155

付属語 || 31 (助詞「は」 || 12、「ば」 || 5、「ばや」 || 2、

「ばかり」 || 11、「ばら」 || 1、10.5%)

濁音 || 52 (17.6%)

以上の分布状況からまずいえるのは、

1、「盤」は助詞「は・ば」専用である。629例中例外は次の1例のみである。

ワラハメ 富岡目ひ 307-06 まいるわら《盤》女は正木つらの手

すき掛けて火たき

2、「ハ」は助詞ないし自立語語中語尾に用いられ、自立語の語頭にくることはほとんどない。これも913例中例外は次の1例のみである。

ハツカ 冊子天津 14ウ-09 た、口とちてそ有ける上皇《ハ》つか

四歳にて

3、「者」「は」は助詞に用いられることは少なく、ほとんどの例が自立語の例である。語頭と語中語尾の割合は両者とも同じくらいである。

このように、いずれの字母もかなりの用例があるのに、割合にはつきりした使い分けが指摘できるのである。なお、つけ加えておくと、

字母「者」のうち助詞に用いられた17例の中には、くずしが漢字の「者」に近いものが約半数の9例みられた。ただ、残り8例はふつうのくずしなので、字体によって用法に違いがあるというのでもなさそうである。

近世の他の人の用法をみておくと、

一、①、近松の浄瑠璃本では「ハ」を助詞及び語中語尾に使う。音

はほとんど「ワ」(濁音符をつかっている)で濁音は「バ」などと表記する)である。

②、「者」はだいたい「ハ」の音。語頭ないし語頭的なものが多い。

③、「は」「は」は「者」の変字法として使用しているらしく、語頭例が多い。

④、「盤」は用例が少ないが助詞「は」が行頭にきたときに使用している。(文献③坂梨氏による)

二、「おくの細道」では「者」を助詞「ば」に用いる例がいちばん多い。

三、『雨月物語』でもその傾向がある。(以上二項は文献⑨前田氏による)

『雨月物語』の例などは『春雨物語』の調査結果とは対立するわけ、ぜひくわしい調査を試みたいと思うが、全体として、用法は個人個人違うにしても、各人の中ではある程度の使い分け意識は認められる傾向にあるようである。

2、《ハ》の仮名について

## A、字母「ひ」

「ひ」の用法分布は次のとおりである。

全用例数 808

自立語語頭 125 (15.5%)

同語中語尾 683

付属語 0

濁音 173 (21.4%)

これを「飛」「日」「悲」「備」と比較してみる。

## B、字母「飛」

全用例数 26

自立語語頭 0

同語中語尾 26

付属語 0

濁音 5 (19.2%)

「ひ」とくらべると、すべて語中語尾というのがきわだっている。もともと、語頭率はそんなに高くはない仮名だが、それでも、これは極端なカタよりといえる。濁音率は平均的などところで特に少ないともいえない。全用例をあげる。

アガナヒ 卷子宮木 368-02 五百くわんの馬買てあかな《飛》  
 イザナヒ 卷子宮木 357-02 な《飛》て見せんとて兎原の郡  
 イザナヒ 富岡目ひ 316-03 とていさな《飛》行この夜の事

は神人

イヤマヒ	富岡燐燐 406-04	ま《飛》に山にのほらん友たち 詣むるに
ウカビ	富岡海賊 285-05	追やらはれし後は海にうか《飛》
ウタヒ	富岡血か 201-04	豊としようた《飛》良禽木をえら はす菓
ウタヒ	富岡血か 216-07	うた人等七たひうた《飛》上る 網代の波はけふ
エラビ	富岡天津 233-05	取え《飛》て行はせたまへは御 世はた、
オコナヒ	卷子宮木 344-05	な《飛》たまへりけり彼めのと は寡
オヒ	富岡目ひ 315-05	にお《飛》ひくきあした履てゆ らめき立
オモト	富岡海賊 269-02	五歳のあいた参らんとおも《飛》 しかと
オモヒ	富岡目ひ 297-04	しくおひたちてよろつに志ふか く思《飛》
カタビラ	佐藤血か 001-04	□かた《飛》ら
カミヤラヒ	富岡血か 210-01	ら《飛》をらひ聲高らか也一日 皇太弟
カヨヒ	富岡血か 216-06	けくかよ《飛》てつかへ萬代ま でに是を
クルヒ	卷子捨石 320-02	しかくの事にて酔くる《飛》 のあまり

コヒ 佐藤血か 006-08 めて神代なからのをらひ聲□て  
 とこ《飛》  
 コヨヒ 富岡樊噲 387-06 こよ《飛》のほりて正しくしる  
 しおきて  
 ゴヒラ 富岡樊噲 417-02 五《飛》らあるを心たよりに旅  
 人にやつし  
 シノビアヒ 富岡海賊 276-07 てはしのひあ《飛》見とかめら  
 れたり  
 タヒラカニ 富岡海賊 264-06 安き心こそなけれど、くた  
 《飛》らかに宮古へ  
 タマヒ 富岡血か 212-09 ま《飛》ぬ空海あした参る問せ  
 たまへるは  
 タマヒ 富岡血か 222-07 たま《飛》ては兄み子打もたし  
 宇治につかふ  
 ヒトタビ 富岡目ひ 304-06 に一た《飛》御目たまはらはや  
 と申て山つとの  
 マネビ 富岡序文 199-04 事なし物かたりさまのまね《飛》  
 はうひ  
 マヒ 卷子宮木 339-05 たかく立ま《飛》哥よみて人の  
 心をなくさ  
 平安朝作品では『平仲物語』に1例、『更級日記』に20例あるが、  
 『更級日記』などではかなり語頭の例があり（「ひかる源氏」「ひぐ  
 らし」「ひんがし」など）、秋成の用法は必ずしも一般的とはいえな  
 いようである。

C、字母「日」

全用例数 || 14  
 自立語語頭 || 0  
 同語中語尾 || 21  
 付属語 || 0  
 濁音 || 11 (78.6%)  
 「飛」と同様すべて語中語尾というのもきわだっているが、それ  
 以上に濁音の多いのが目立つ。濁音専用とはいえないが、「春」と同  
 様、濁音率の高い字母といえる。全用例は次のとおりである。  
 オトコサビ 冊子天津 15-04 男さ《日》たまへば、国ぶりの  
 歌よむひとは、たゞ口閉て  
 キキヒラシ 富岡血か 225-01 心かよはず奈良坂の人も有  
 て、聞《日》らし、あ  
 コヨヒ 富岡樊噲 451-07 見すな。こよ《日》の宿りに  
 は、今一ひら増て  
 サビシキ 冊子楠公 43-02 楠公湊川の陣に夜雨蕭々とき  
 《日》しきに近臣  
 サビシサ 冊子楠公 55-02 夜の雨のさ《日》しきに、近  
 臣をめされて、「面白  
 シノビ 冊子血か 02-04 にかよひ来たり。新羅は哀莊  
 王のいにしへをしの《日》て  
 チカタビラ 富岡血か 200-05 血かた《日》ら

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

七六

ナビカズ 冊子血か 11-09 弓に射れどな《日》かず。劔  
にうてば  
ナビキ 卷子宮木 380-07 かより依是 玉藻なす な  
《日》きてぬれば  
マナビ 富岡目ひ 298-01 な《日》てん。高き御あたり  
によりて、習ひつたへ  
ムスビ 富岡目ひ 302-04 むす《日》上て金剛杖つき鳴  
し多り其跡  
ワトラヒ 富岡海賊 285-06 わたら《日》す。人の財を我  
たから  
ワビ 卷子宮木 343-01 わ《日》泣して、ついに空し  
くならせ  
ワビシキ 冊子樊噲 41-11 の津へ遊行て、やもめ住のわ  
びしきわ《日》しきもとに

平安朝作品の例をみると『土佐日記』以外の三作品にそれぞれ4  
0-50例ほどあるが、語頭の例も「ひとり」「ひとつ」など多くは  
ないがあり、また、濁音の例も特に目立つというほどではない。や  
はりこれも秋成独自のものと思われる。

#### D、字母「悲」

これは次の4例である。

ナビカズ 富岡血か 229-03 き若者は弓に射れどな《悲》かず。

劔に

ヒトリ 富岡目ひ 310-05 《悲》とり行には、いかで我さす枝  
折のほか  
ヒソミ 冊子血か 09-07 空にせはだかり、又《悲》そみては  
芥子の中に  
ヒマ 佐藤目ひ 054-09 きゆると、待ころの《悲》まあら  
ずして

最初の「なびかず」だけが語中濁音であとの3例は語頭清音であ  
る。が、これだけでは、使い分けを意識していたかどうかはわから  
ない。

また、古筆に例がある（万葉仮名にも）というが、割合にめずら  
しい字母ではないかと思われる。

#### E、字母「備」

これは2例とも濁音である。古筆に例がなく、万葉仮名ではヘビ  
乙類の濁音仮名として使用されているので、秋成もそれに倣って  
濁音専用仮名として用いたものであろう。以下に用例を掲げる。

アソビ 卷子宮木 357-05 あそ《備》に行けり林の花みたれ咲た  
るに

ワビ 卷子宮木 362-04 閉めたまへりきいてきてわ《備》びた  
まへと云た、

#### 3、へふの仮名について

#### A、字母「ふ」

字母「ふ」の分布状況は次のとおりである。

全用例数 || 627

自立語語頭 || 112 (17.9%)

同語中語尾 || 515

付属語 || 0

濁音 || 111 (17.6%)

これを次項「布」と比較してみる。

B、字母「布」

全用例数 || 22

自立語語頭 || 10 (45.5%)

同語中語尾 || 12

付属語 || 0

濁音 || 7 (31.8%)

「ふ」と比較すると、こちらは自立語語頭の例がやや多く、濁音率も低い。割合に「上にくる」ことの多い字母といえそうである。

C、字母「婦」

これは次の1例のみである。

フルマヒ 卷子宮木 340-05 よく立《婦》るまひ静に文よむ事を

専

ここでは、清音の例に使用されているが、平安四作品中でも計7例はやはり語中語尾の清音に用いられることが多いようである。一部を引いておく。

平仲 070-03 たま《婦》人もやものしたまふとてといひた

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

和泉 002-07 まいりてさふら《婦》とかたるいとよきこと

和泉 003-10 かほるかによそ《婦》るよりはほと、きす

和泉 005-04 とのたまはせたりもともころ《婦》か、ら

和泉 106-11 《婦》るさとまつ思いてらるかくてさふら《婦》

和泉 110-09 た、にさふら《婦》もなをものおもひたまゆ

更級 071-07 《婦》かき夜に月見るおりはしらねとも

4、へへの仮名について

A、字母「へ」

「へ」の他の二つの字母「遍」「辺」の用例はいずれも一例のみであるので、他の仮名のように分布状況が必要とはしない。よって、字母「へ」にはついてこれ以上触れず、他の二例の検討だけですませることにする。

B、字母「遍」

これには、次の例が該当する。

タマヘリ 富岡樊噲 393-02 しきが中にた、せたま《遍》り。か

んなぎ

平安朝作品では『和泉式部日記』に例があり、それらは次のようにどれも自立語語中語尾（「かへり」「かへし」などの語が多い）である。

和泉 007-08 させつればありなからか《遍》したてまつらん

和泉 009-04 とのたま《遍》は

和泉 021-02 とおほして御か《遍》り

和泉 029-01 御か《遍》し  
 和泉 041-04 をとろかすかときく《遍》かりける  
 和泉 047-10 つみもゆるしきこえぬ《遍》し  
 和泉 059-06 ほえて御いら《遍》すへき心ちもせねは  
 和泉 081-08 御か《遍》し  
 和泉 086-05 御か《遍》り  
 和泉 091-05 君はきみわれは我とも《遍》たてねは  
 和泉 092-11 御か《遍》し  
 和泉 099-02 御か《遍》し

ただ、『ひとと草』にも何例か使用例があつて、こちらでは語頭にも語中語尾にも付属語にも用いられていて一定しない。が、いずれにしても、割合に使われることの多い字母であることは確かである。

## C、字母「邊」

これは、実は字母とすべきか若干迷う例である。用例は、  
 アトベ 冊子血かウ-07 御はか詣たまへり百官百司みさき追  
 ひあと《邊》に

であるが、他に同じ文字を漢字として用いた例が

卷子宮木 337-02 本州河邊こほり神さきの津はむかしより  
 卷子宮木 338-02 河邊郡とよふ是はるなの川邊と云へ  
 冊子天津 20-02 にあつかるへからすとて葛野川の邊の今  
 冊子樊噲 39-04 せはこ、も海邊にて神の御やしろう有松杉  
 のように存在し、なかでは、冊子本「天津処女」の「葛野川の邊

の」という例が用法的にも字体としても近い。ただ、「川の邊」とは書くだろうが、「あと邊」とは書かないであろうという理由によって（古筆に例があることもあり）仮名字母と認定したのである。

## 5、へほの仮名について

## A、字母「ほ」

「ほ」の用例の分布状況は次のとおりである。

全用例数 209  
 自立語語頭 88 (42.1%)  
 同語中語尾 121  
 付属語 0  
 濁音 75 (35.9%)

これによると、語頭・語尾の比は2対3程度、濁音も30〜40%くらいである。

## B、字母「本」

全用例数 42  
 自立語語頭 8 (19.0%)  
 同語中語尾 34  
 付属語 0  
 濁音 21 (50%)

「ほ」と比較すると語中語尾の割合がかなり高く、濁音率もやや高いといえる。その他では、語頭の用例を比較しても語としてはほぼ重なっており、特別の違いはみられない。

## ⑦、ま行の仮名

## 1、へまの仮名について

A、字母「ま」

字母「ま」の用法分布は次のとおりである。

全用例数 671

自立語語頭 133 (19.8%)

同語中語尾 506

付属語 32 (「まく」1、「まし」7、「まじ」10、「ます」5、「まで」30、「まま」39)

これを「万」及び「満」と比較してみる。

B、字母「万」

全用例数 336

自立語語頭 40 (11.9%)

同語中語尾 278

付属語 18 (「まし」1、「まで」12、「まま」5、「まほし」3)

「ま」と比較するとやや語頭の割合が低いかという程度である。なお、「まほし」3例はここに出る例がすべてで、「ま」や「満」は用いられていない。

C、字母「満」

全用例数 49

自立語語頭 20 (40.8%)

同語中語尾 28

付属語 1 (「まで」)

こちらは、「ま」「万」と比べるとかなり語頭率が高いといえる。また、付属語も「まで」の1例しかなく、文字面からいっても用法からみても割合に重い感じのする字母といえる。

D、字母「麻」

これは次の1例のみである。

ウマヤ 卷子宮木 359-01 のう《麻》やの長藤太夫と云も、けふ  
こゝに

古筆に例があり、また万葉仮名としても『万葉』四四二九に「うまや(宇麻夜)なる」という例があるが、字母としてはめずらしい方に属するであろう。

## 2、へみの仮名について

A、字母「み」

字母「み」の用法分布は次のとおりである。

全用例数 249

自立語語頭 81 (32.5%)

同語中語尾 155

付属語 || 13 (「のみ」)

これを「ミ」と比較してみる。

B、字母「ミ」

全用例数 || 215

自立語語頭 || 46 (21.4%)

同語中語尾 || 134

付属語 || 35 (「のみ」)

両者比較すると、「ミ」の方がやや語頭に来る割合が低い。これは、割合に一般的にいえることではないかと思う。〔注6〕

3、へむの仮名について

A、字母「む」

「む」の用法分布は次のとおりである。

全用例数 || 233

自立語語頭 || 79 (33.9%)

同語中語尾 || 139

付属語 || 15 (「しむ」「む」)

これを次項の「無」と比較してみる。

B、字母「無」

全用例数 || 25

自立語語頭 || 0

同語中語尾 || 23

付属語 || 2 (助動詞「む」)

助動詞「む」の2例以外はすべて語中語尾の自立語である。これは「む」と比べてもかなりきわだった特色といえる。全用例を引いておく。

イサム	冊子捨石	48ウ08	二男ならずや心よわしとさま／＼いさ《無》家の子
オサム	冊子妖尼	25ウ01	使に海内を治《無》しかれとも朝につかへて家
カナシム	富岡海賊	272ウ01	によるこふへく悲し《無》へきかあり故に
サムル	富岡樊噲	426ウ01	こ、に日頃ありしかや、さ《無》るにも物くはねは
シガム	富岡目ひ	313ウ04	しをとり出してしか《無》らつきわらへ顔し
スム	冊子楠公	44ウ09	事を授けん汝かす《無》流れにはいつより
タム	富岡血か	208ウ08	にあしきを撓《無》かと思はれは又枉て言
トドム	冊子海賊	21ウ06	《無》と思ふほどに日数へたり又海賊おひ
ニクム	佐藤血か	008ウ05	阿諛の舌ありと憎《無》／＼いかなれば太弟
ニクム	冊子天津	20ウ02	もろこしの文学ふ事をにく《無》人多かり



上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

ノム	佐藤血か	007-16	渴けは飲《無》争ふ事なければ聖人出す
ノム	冊子血か	06オ-04	てはくらひ渴しては飲《無》民の心也と申打
ノム	富岡樊噲	390-02	投やり火切出してたはこの《無》
ム	卷子捨石	327-01	苦もなく首とられ《無》かく
ム	富岡天津	255-07	二人ね《無》かく云てそこをはやく立
ヨム	卷子歌の	335-05	思ひは述たるもの也歌よ《無》はおのか
ヨム	卷子宮木	340-05	よく立ふるまひ静に文よ《無》事を専
ヨム	卷子二世	101-10	夕しくれかな母もよ《無》飛鳥川
ヨム	佐藤天津	026-02	経よ《無》聲のた、ならすおほ
ヨム	冊子天津	14ウ-08	口つきこはくしくて國ふりの歌よ《無》人は
ヨム	冊子天津	15オ-04	男さひたまへは國ふりの歌よ《無》人はた、口閉て
ヨム	冊子二世	36ウ-02	詩つくり歌よ《無》雨やみて窓の紙
ヨム	冊子二世	36オ-03	ゆたか也常に文よ《無》事を好み
ヨム	冊子目ひ	33ウ-05	よ《無》はおのか心に思ひ得たらん人に教へ

ヨム 富岡海賊 285-03  
よ《無》事を好みて人にほこりにく

4、《め》の仮名について

A、字母「め」

次項「免」との比較上、自立語語頭の割合だけをみておく。

全用例数 511

自立語語頭 92 (18%)

B、字母「免」

前項ではくわしい数字を出さなかったが、「め」には当然予想されるように推量の助動詞「む」や使役の助動詞「しむ」の活用形など付属語の例が多い。しかし、この「免」では、以下の9例はすべて自立語語中語尾の例であり、あきらかなかたよりがあるといえよう。その意味では、特色ある用法の見られる字母のひとつといえる。

アタタメ 佐藤目ひ 037-17  
《免》よ」となり  
しはいとよろこばし。先酒あた、

アツメ 富岡海賊 271-01  
題号は、昔の誰があつ《免》しと  
もしらぬ

アメ 富岡血か 214-09  
は即あ《免》を指かと聞けば、命  
禄也と云。

イサメ 富岡目ひ 299-03  
いさ《免》もせず、別かなしくも  
あらずて出た、

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

八二

スズシメ 佐藤血か 006-09 やらひ清めす、し《免》たりしかは御心

トガメ 富岡海賊 276-07 ては、しのびあひ、見とが《免》られたり

トメ 卷子宮木 337-06 船と《免》て日を過すその又昔は猪名の

ナグサメ 富岡血か 206-08 とはかりては、薬子と心あはせ、なぐさ《免》たい

ヒロメ 富岡海賊 278-05 して、境をひろ《免》、人多く産べ

5、《へも》の仮名について

A、字母「も」

この仮名ももうひとつの字母が1例のみの孤立例なので「も」についでにくわしい検討は行なわれない。この字母も字源漢字の「毛」に近いものなどくずしによって2-3種に区別できたかもしれないと思う。

B、字母「茂」

用例は次の1例である。

トモ 富岡目ひ 300-01 と《茂》なくて、大樹の朽たをれし有。

古筆に例があり、南畝の『向岡閒話』にも1例だけ使用例があった。しかし、南畝の例が秋成同様助詞「も」の例なのかどうかは矢野氏の論文に記載がないので確かめることはできなかった。

⑧、や行の仮名

1、《へや》の仮名について

A、字母「や」

これも「も」と同様、他の2例とも用例数が極端に少ないので「や」自体の用例分布状況などは必要としない。以下、「夜」「屋」の例のみを検討する。

B、字母「夜」

これは1例のみである。

アヤシ 富岡目ひ 301-07 しき眠りにつかんとす。あ《夜》し、

こゝに

古筆や万葉仮名に用いられているが、めずらしい方の字母であろう。

C、字母「屋」

この字母は次の1例である。

ネヤ 冊子桶公 45-06 とて述いづるを、はさみね《屋》の口に

在てまめく

ただ、この文字を漢字として用いた例が8例あり、次の三例などは若干区別したいところがある。

富岡海賊 267-03 つらゆき舟屋かたの上に

富岡海賊 292-07 問へばふん《屋》の秋津なるへし文

富岡樊噲 446-01 とめんにも家なしひとつ《屋》のやうにて一  
 「屋形」「文屋」をこのように漢字仮名まじりで書く秋成のことだ  
 から「寢屋」のつもりで「ね屋」としたと考えることもできるから  
 である。ただ、字母としては、版本や古典作品にも例がありそれほ  
 ど珍しいものではないので、この例も仮名と認めて加えたのである。

## 2、へゆゝの仮名について

A、字母「ゆ」

この「ゆ」ももうひとつの字母が1例のみなので「ゆ」自体につ  
 いての検討は省略する。

B、字母「遊」

用例は次の1例である。

富岡海賊 267-03 よとて、さわぎたつ。つら《遊》き舟屋かた  
 の上に

秋成にはこの例しかないが、平安朝作品では『和泉式部日記』に  
 13例みられた。それらを全部あげてみる。

和泉 001-04 りもて《遊》くついひちのうへの草あを

和泉 009-10 きまてにこそおほ《遊》れとてやをらすへ

和泉 011-03 かへりまいるにきこ《遊》

和泉 030-03 心も《遊》かすめはそらにして

和泉 033-01 きこ《遊》

和泉 073-06 けなるま《遊》みの紅葉のすこしもみちた

和泉 074-04 たまへるあらまほしうみ《遊》めさへあた、しき

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

和泉 080-05 きこ《遊》れとしゐてゐておはしまして

和泉 081-11 とときこ《遊》かはかりねんころにかたしけなき

和泉 086-06 うらむらむ心はた《遊》なかりなく

和泉 088-11 おほれはきこ《遊》

和泉 096-08 おもひみたれてきこ《遊》

和泉 110-09 た、にさふらふもなをものおもひた《遊》ま

こちらは語頭例・語中語尾例ともに見られるようである。

なお、へよゝには一種の字母しか用いていないのでこの調査の対象  
 にはならない。

## ⑨、ら行の仮名

ら行の場合、これまで用法上の目安のひとつとしてきた自立語語  
 頭の例はほとんどなくむろん濁音も存在しない。だから、用法上の  
 目安となるのは、自立語か付属語かというあたりになる。

### 1、へらゝの仮名について

A、字母「ら」

もうひとつの字母「羅」がわずかに2例なのでそちらの方の例を中  
 心にみていく。

B、字母「羅」

2例は次のとおりである。

チカタピラ 富岡血か 200-05 血かたひ《羅》

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

アララカ 富岡海賊 266-06  
《羅》ら、かに云。何事ぞといへば、國を出させ

いずれも自立語の用例である。「ら」の方には、「なり」「たり」「り」など付属語の例が多数存在することを思えば、3例とはいえあるかたよりを認めていいように思う。また、富岡本だけに限られていることも注意すべきであろう。

2、へりゝの仮名について

A、字母「り」

「り」の分布状況は次のとおりである。

全用例 1489

自立語語中語尾 940 (63.1%)

付属語 550 (「けり」 29、「ざり」 10、「なり」 77、

「ばかり」 17、「べかり」 3、「たり」 213、

「より」 106、「り」 94)

これを「里」「理」と比較してみる。

B、字母「里」

全用例 156

語中語尾 97 (62.2%)

付属語 59 (「けり」 32、「たり」 14、「より」 5、

「り」 8)

語中語尾と付属語の割合は同じくらいだが、付属語の中では「けり」の用例が「り」と比較しても多いようである。

C、字母「理」

全8例をすべて引いておく。

モノガタリ 富岡序文 199-01 春雨物かた《理》

ヒトリ 富岡目ひ 310-05 ひと《理》行には、いかで我さ

モトヨリ 富岡樊噲 385-04 すみて、夜はもとよ《理》、昼も

ノボリ 富岡樊噲 387-03 山に夜のば《理》、しるし置て帰

タリ 卷子宮木 356-06 立た《理》けり。春立てやよひ

コモリ 卷子宮木 363-06 の とも《理》をらん」とて、息つ

コモリ 卷子宮木 363-06 きつ、しみをる

カタリ 冊子楠公 43-01 慈悲かうむ《理》て成就

カタク 冊子楠公 43-01 楠公雨夜かた《理》

卷子宮木の「たり」1例を例外としてあとはすべて自立語である。

少ない用例ではあるがこの「理」もかなりかたよりの見られる字母

といっているように思う。

3、へるゝの仮名について

A、字母「る」

「る」の用例分布は次のとおりである。

全用例数 || 946

同語中語尾 || 643 (68%)

付属語 || 303

これを「流」「類」と比較してみる。

B、字母「流」

全用例数 || 59

同語中語尾 || 51 (86.4%)

付属語 || 8 (「た」「なる」「らる」)

C、字母「類」

全用例数 || 37

同語中語尾 || 31 (83.7%)

付属語 || 6

「流」「類」ともにやや付属語の例が多いようだが、これだけでは特にかたよりがあるともいえない。

#### 4、へれゝの仮名について

A、字母「れ」

「れ」の用例分布は次のとおりである。

全用例数 || 527

同語中語尾 || 341 (64.7%)

付属語 || 1868 (「ざれ」「めれ」各1、「たれ」|| 42、「なれ」|| 31、「ぬれ」|| 3、「べけれ」|| 21、「られ・れ」

|| 108)  
これを次項と比べてみる。

B、字母「連」

全用例数 || 206

同語中語尾 || 130 (63.1%)

付属語 || 76 (「けれ」|| 6、「たれ」|| 20、「なれ」|| 17、

「ぬれ」|| 1、「べけれ」|| 2、「られ・れ」|| 32)

両者の間にほとんど有意の差は認めがたい。

#### 5、へろゝの仮名について

A、字母「ろ」

これももうひとつの字母の使用例が8例と少ないので用法分布は省略する。

B、字母「路」

8例は次のとおりである。

ウシロ 富岡血か 211 05 うし《路》の山より黒き雲きり

立昇りて、雨

オソロシサ 富岡目ひ 301 02 物おろして、心おちゐたれば、

おそ《路》

ヒゴロ 富岡樊噲 438 04 剛にも、交りがたき人も有よ

とて、日ご《路》

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

モロコシ 冊子天津 12オ<sup>1</sup>07 機をこ、ろみさせたまふに、も

《路》ろこし

モロコシ 冊子天津 13ウ<sup>1</sup>08 花やきてた、参るものにも《路》

こしの

モロコシ 富岡天津 237<sup>1</sup>06 参る者にも、も《路》こしのふ

みよめとす、めたうぶ。へ田原本

は「も《路》こし」

モロコシ 富岡樊噲 421<sup>1</sup>03 蹴たをして、も《路》ろこし人

の前に

ヨロヅ 富岡海賊 273<sup>1</sup>07 とうたはひとつ心を種として、

よ《路》づの

すべて自立語の例であるが、字母「ろ」の方にも付属語の例はないので特色とはいえない。「もろこし」という語が4例あるのも気になるどころだが、「ろ」にも14例あるのでこれも問題にはならない。結局、両者の間に用法上の差異は認められないという結論になる。

### ⑩、わ行の仮名

#### 1、へわの仮名について

A、字母「わ」

「わ」の分布は次のとおりである。

全用例数 150

自立語語頭 108 (72%)

同語中語尾 43

これを「王」と比較してみる。

B、字母「王」

全用例数 75

自立語語頭 48 (64%)

同語中語尾 27

両者比較すると、「王」が語頭にくる割合はやや低いですが、しかし、特にかたよっているともいえないであろう。

#### 2、へゐの仮名について

A、字母「ゐ」

もうひとつの「井」の例が1例しかないので、そちらだけを見ておく。

B、字母「井」

用例は次の1例である。

ウナイ 卷子宮木 350<sup>1</sup>05 うな《井》髪かき上て、さめく<sup>1</sup>ない  
給ふ。

「ゐ」にはこの「うなる」という語の例は見えない。また、『和名抄』に「宇奈井」とあることも関係あるのかもしれないが、1例だけではなんともいえない。

#### 3、へゑの仮名について

それぞれ全用例を引いておく。

A、字母「ゑ」

- エミテ 富岡血か 207-01 まつる。よからぬ事も打《ゑ》みて、是が心をも
- エマセ 富岡血か 217-05 すゞしくこそ吹け」とて、打《ゑ》ませたまふ。左中
- スエテ 卷子宮木 345-03 膝にす《ゑ》て、たゞ涙の干るまなくぞ
- エミス 卷子宮木 371-05 ほどに、藤大夫よくしたりと独《ゑ》
- エミタル 冊子目ひ 31-03 右手に持て、少し《ゑ》みたるがおそろし。
- スエテ 冊子宮木 50ウ-03 す《ゑ》て、たゞ泪のひるまもなくておはするに
- エミテ 佐藤目ひ 049-06 閉つ。女房打《ゑ》みて、「色に酒にたわけるは

7例は語頭が5、語中語尾が2という割合である。

B、字母「衛」

- スエ 富岡焚噺 424-01 聞て、いかにすべきにあらねば、心をす《衛》
- スエ 卷子二世 101-20 子を膝にす《衛》て、もとのて、様こひしと

ヨシエヨシ 冊子血か 13裏-06 いつはりて、又人の諷となる。

よしゑよしし《衛》よし世の

中の

- エミ 富岡目ひ 304-03 を右手に持て《衛》みたるが恐し。かん人)
- エミテ 冊子血か 03ウ-03 打《衛》みて是等が心をとらせたまひぬ。よひくくの
- スエシ 佐藤目ひ 038-17 好めるには二つのむ。三輪山にほりす《衛》ゑし
- スエテ 佐藤目ひ 063-07 す《衛》て、なめこゝろ見んものぞ。夜更ぬ。

この7例は語頭が2例、語中語尾が5例と前項とは逆転している。しかし、それ以上に語としての選択性などはみられない。

4、へをの仮名について

A、字母「を」

「を」の分布は次のとおりである。

全用例数 || 850

自立語 || 86 (10.1%)

助詞「を」 || 764

これを「乎」「越」と比較してみる。

B、字母「乎」

全用例数 || 115

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

自立語「を」 5 (4.3%)

助詞「を」 110

C、字母「越」

全用例数 13

自立語 0

助詞「を」 13

「乎」「越」は「を」にくらべると自立語の割合が低いという傾向がみられる。

また、「乎」に関しては前にも触れたように「支」と同様冊子本に異常に多いことにも注意すべきである。用例の大部分は助詞「を」であるが、なぜこういう現象がみられるのか、今のところは不明というしかない。



## 六、歌学書・仮名遣書の記述との関係について

本稿の最後に、仮名字母の位置の問題に関する歌学書・仮名遣書の記述と、今回の調査結果がどの程度符合するかを検討しておかねばならない。

たとえば、『歌学大系』第4巻に収められている『和歌大綱』では、「上にかかぬ・・」「下にかかぬ・・」「上下わかぬ・・」というふうに字母の用法を区別している。また、近世初期の仮名遣書である『新撰仮名文字遣』にも同様の記述がある。これらによって、古くから字母の位置に関してある種の慣習のようなものが存在したらしいことが推測されるのだが、とりあえず、これら二書から秋成と関係あるものを取り出してみると次のようになる。

- 1、「下にかかぬ文字」  
「阿」「希」「古」「佐」「志」「堂」「徒」「泥」「本」
- 2、「上にかかぬ文字」  
「登」「那」「遍」「邊」「路」

この種の書物の常として網羅的ではないし相互に矛盾する点も少なくない。また、「下にかかぬ文字」として「阿」をあげたり「上にかかぬ文字」として「路」をあげたりするのはあたりまえすぎて真意不明というしかない。が、その他の字母については、前節までの調査結果と対照させることができる。

その結果をみると、「下にかかぬ文字」としてあげられているうちでは「佐」「志」「徒」「本」が、秋成の用法でもやはり語頭率が高く該当するものであった。なかでも、「志」に語頭例が多いことは、南畝の『向阿間話』でも同様であり、他に版本の御伽草子（文献⑦大友氏論文）・惠信尼文書（文献②安田氏論文）などでもそのような傾向のあることが報告されている。その意味でこの「志」の用法に關してはかなり一般的なものといえそうである。また、「古」も南畝の場合は語頭自立語の例が多いということであり、これも一般性のある用法と思われる。

また、「上にかかぬ文字」の中では「登」「那」などが秋成の場合もほぼあてはまるものであった。

しかし、全然逆の用法分布を示すものもある。その代表が「希」で、「下にかかぬ文字」と『和歌大綱』はいうが、秋成の用例では語中語尾の自立語専用字母であった。南畝も語中語尾の例が多いということなので、秋成だけの癖でもなさそうである。また、「堂」もその例にはいる。

が、全体的な傾向としてはそれほどいいかげんなものでもないようである。ただ、これらは自然にできた慣習のようなもので、特別に規範意識をもってのことではなかったらうと思われる。

以上で秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母についての調査報告を終える。

秋成の用例に関してはすべてを調べたつもりであるが、それに時間をとられすぎたため、平安朝四作品や『ひともと草』等との比較が充分に行えなかったことが心残りである。

前述のごとく今回の調査においては、全面的にパーソナル・コンピュータに依存したわけであるが、それゆえにこそ、その利点と欠点を身をもって知ることができたと思う。特に今回のような文字列の検索を主体にした調査では、基礎データさえきちんと与えてやれば、相当地に威力を発揮することがよくわかった。本稿でも、しばしば平安朝作品の例を引いたが、これはフロッピーに記録されているから簡単に引いてくれたわけで、量だけでいえば平安朝四作品の十分の一以下であるにもかかわらず、『ひともと草』のように紙にまとめられたただだとこのように簡単には引いてこれなかったのである。

しかし、いかに、簡単に集められるといっても、集まった用例の分析までコンピュータにまかせるわけにはいかない（もし、それをさせるとしたら膨大なプログラムが必要であろう）。その点で、量的な面は簡単に調べられるが、質的な部分はやはり人間に依存するのである。平安朝四作品の用例に関して立ち入った言及をしていないのはそのためである。

ともあれ、私自身は字母の面から『春雨物語』をながめていくという作業はとりあえずこれで終了するつもりである。最初にも述べたように、この過程で作成した本文ファイルや索引ファイルを利用して、もうすこし秋成の表現の特質にせまる方法をさぐりたいと考えているからである。

本調査を進める過程で多くの貴重な示唆を与えられた古屋彰・稲田篤信・鈴木孝志・富士昭雄の各氏に深く感謝いたします。また、貴重な資料を作成・提供していただいた荒井喜久子氏及び内田保廣氏、貴重な時間を割いて何度か本調査のためのプログラムを作成していただいた大岸通孝氏に改めてお礼申し上げます。

#### 文 献 一 覧

- ① 鈴木真喜男 「地」のかな―定家自筆本における―国語研究 昭和33年11月
- ② 安田 章 仮名字母遺序 国語国文40・2 昭和46年2月
- ③ 坂梨隆三 曾根崎心中の「は」と「わ」  
―その仮名遣と仮名の字体について―  
茨城大学人文科学論集12 昭和54年3月
- ④ 浜田啓介 板行の仮名字体―その収斂的傾向について―  
国語学118 昭和54年9月
- ⑤ 矢野 準 太田南畝の文字生活 ―『向阿聞話』のかなの用字法について―  
『近代語研究』第6集 昭和55年5月
- ⑥ 表章・後藤ゆう子 世阿弥の平仮名書の用字法の特徴（上・下）  
能楽研究5・6 昭和55年11月・昭和56年3月
- ⑦ 大友信一 「新撰仮名字遣」と表記の実態  
岡山大学文学部紀要2―文学編（通巻42） 昭和56年12月
- ⑧ 浜田啓介 出版と文字の歴史  
『講座日本語』（明治書院刊） 昭和57年5月
- ⑨ 前田富祺 近世にはどんな仮名遣が行われていたか  
国文学 昭和57年12月
- ⑩ 平林文雄 『算物語』（甲本）仮名字母索引と漢字・仮名字母の使用について  
『春雨物語』序説―諸本研究史の試み―
- ⑪ 木越 治

⑫伊坂淳一 藤原俊成の用字法・試論  
 金沢大学教養部論集人文科学編23-2 昭和61年3月

―自筆本『広田社歌合』における機能的用字法―

学苑577・578 昭和63年1・2月

注1、原本の卷子本という形態を尊重するとすれば、頁数は示さず各巻ごとの通し番号で処理するべきであろうが、それでは実用的ではないので、影印本の頁数と行数を利用した。ただし、影印本では各頁の最後の行と次の頁の最初の行が重複している場合も多いが、この場合は適宜読み取りやすい方を採用してある。

注2、調査に使用した字母本文ではわかりにくいのでこのように変換したもので示すことにした。ただし、句読点、濁点を付したかたちでないのは、後述するごとく現在のコンピュータで一括処理が可能か否かということに関連している。

注3、原本では79行目のあとにさらに16行分の断片一葉が貼付されている。しかし、これは嶋田彩司氏が『胆大小心録』緒論(一)〔近世文芸・研究と評論35号 昭和63年11月〕において指摘することく、『胆大小心録』一〇の一部がまぎれこんだものとみるべきなのでここでこの調査対象からは省いた。

注4、

最初に写真版を横に置いて作成していった本文は

- 102-01 この卿も多欲爾て又よく謀りて海内の  
 102-02 総追捕使といふ名を申く多してつひ爾  
 102-03 王城をおとす事平氏爾過多才智  
 102-04 ありて大納言右大将爾と、まりしハ西  
 102-05 土爾て曹操可帝をさしはさみなる  
 102-06 帝臣爾て終りしとひとつ也其子の  
 102-07 曹丕ハ愚爾て一つ耳う者ひ代る又

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

102-08 骨肉爾も才あるハせまり七歩の詩爾

102-09 名をとらしむハ拙なり短なり

102-10 曹丕可くの如く愚なりし可ハ司馬爾

というようなものである。しかし、これでは漢字として用いられた「多」「也」などと仮名として用いられたものとの区別が必要であり、用例数の多いものになるとその識別だけでもかなりの作業となる。しかも、自分の目で確認していくため誤りも少なくない。というわけで、考えた結果、次のように半角アルファベット2文字の組合せで、漢字として用いられた字母漢字を表示するように訂正したのである。

その結果、次のような本文ができあがる。

- 102-01 この卿もTB欲爾て又よく謀りて海内の  
 102-02 総追捕使といふ名を申く多してつひ爾  
 102-03 WB城をおとす事平氏爾過多才智  
 102-04 ありて大納言右大将爾と、まりしハ西  
 102-05 土爾て曹操可帝をさしはさみなる  
 102-06 帝臣爾て終りしとひとつYA其子の  
 102-07 曹丕ハ愚爾て一つ耳う者ひ代る又  
 102-08 骨肉爾も才あるハせまりて七歩の詩爾  
 102-09 名をとらしむハ拙なり短なり  
 102-10 曹丕可くの如く愚なりし可ハ司馬爾

このあたり、かなり試行錯誤を繰り返しており、当初の基本方針をきちんとたてておかなかつたツケがまわってきたというところである。いずれにしても、ここまでの作業はワードプロセッサを使っていたとはいえず、基本的には手作業で進められたわけである。そして、ここまでが全体の作業量の半分以上を占めている(今後国文学研究にコンピュータの導入を考える場合、このデータ入力に費やす時間と作業量をどれだけ少なくするかが最大の問題といえる)。

以下示される検索作業とその結果得られた数字はすべてこの本文を用いて行なったものである。しかし、索引ファイルを作成する段階になるとこの字母本文

では読みとりにくい。そのため、最低限意味の通じる本文とするため、この字母本文をもとに、字母として用いられた漢字を仮名に直し、半角アルファベット2文字をもとの漢字に変換するという処理を行なった本文を作成した。

- 102-01 この卿も多欲にて又よく謀りて海内の  
 102-02 総追捕使といふ名を申くたしてついに  
 102-03 王城をおとす事平氏に過たり才智  
 102-04 ありて大納言右大将にと、まりしは西  
 102-05 土にて曹操か帝をさしはさみなる  
 102-06 帝臣にて終りしとひとつ也其子の  
 102-07 曹丕は愚にて一つにうはひ代る又  
 102-08 骨肉にも才あるはせまりて七歩の詩に  
 102-09 名をとらしむは拙なり短なり  
 102-10 曹丕かくの如く愚なりしかは司馬に  
 前出の字母本文をこのように変換する作業は「S E D (ストリーム・エディター)」という非対話型エディターを利用することによってすべてコンピュータにまかせてしまうことができる。
- しかし、このあと句読点・濁点を付する作業になると完全な手作業で行なうしかない。用法調査のための索引ファイル作成の際はそのままでしなくても充分であったので、10例以下の字母の例以外はすべてこの変換本文を利用し、本文中の用例の引用もこれですませたわけである。
- ともあれ、最終的な卷子本「妖尼公」の翻字本文は以下の通りである。

- 102-08 骨肉にも、才あるはせまりて、七歩の詩に  
 102-09 名をとらしむは拙なり、短なり。  
 102-10 曹丕かくの如く愚なりしかば、司馬に  
 102-11 又かはらる。この代々のみだれ、心ある者は  
 102-12 うらみもし、にくむもして、嵇康が徒  
 102-13 の、大虚に心を捨はじむるは、高きに似て  
 102-14 放なり。頼ともよくはかりてす、ます。  
 102-15 其子より家は愚にして、病に死ぬる。  
 102-16 政子、貞節を守りて尼となり垂簾  
 102-17 のまつり事を諸臣とはかる。諸臣の中に  
 102-18 色あるは、ひそかに招れて、内乱ありし也。  
 102-19 あまさへ、酒に酔みだれて、実子の実  
 102-20 朝をいだく。さね朝才ありし、是にはかり事  
 102-21 なし。母にいだかれて、此愛に、父より  
 102-22 す、みて右大臣に昇るが、又義時  
 102-23 は美男也。尼子めせども来たらず。  
 102-24 是は義時がふかき心あることなり。  
 102-25 ついに奸して、又、さねともとあしく  
 102-26 て代んとて、若僧に仇打とおふせて  
 102-27 鶴が岡に弑逆せしむ。其夜はとみ  
 102-28 に病ありとて、供奉を辞して  
 102-29 兵士十人をすく「はか」りてしのび来  
 102-30 たり。公暁に力をそへて、又公  
 102-31 暁を罪科にす。よし時ついにひとり  
 102-32 尼君とよし。尼又秩夫が大男  
 102-33 にて、実体のかたもよしとてめすとも  
 102-34 来たらざるとしりて、「実朝の弑  
 102-35 逆につきてはかり事あらん「にせん」とて、夜

103 36 めす。重忠いんぎんにいたる。其夜  
 103 37 雪ふりたり。「この所にては事のもれん」  
 103 38 とて、庭中の亭に雪をふんで  
 103 39 あゆみたまへり。重忠かしこまりて  
 103 40 あとにつく。亭のひろさ、わづかに十席  
 103 41 石灰爐に炎たり。尼火に座して  
 103 42 ちかくとめす。重忠膝行していたる。  
 103 43 うしろより女ばらとりつきて、もん  
 103 44 鳥帽子をうばふ。是はとおどろく中に、  
 103 45 素袍の袖に火つきたり。あわやとて  
 104 46 けさんとす。一女ひも刀をとりて  
 104 47 帯をも切て、ついに衣服を  
 104 48 うばへり。尼も又前はだかになりて  
 104 49 重たゝに組む。くまれていかにせんと  
 104 50 思ふうちに、陽精のうごき出て、  
 104 51 ついに徹夜のたのしみをなせり。  
 104 52 さて、後にはめせども来たらず。故に  
 104 53 事よせて家を亡ぼさしむ。  
 104 54 実朝の事は内簾の坊門の娘  
 104 55 のしりたれど、あらわすべきにあらねば、  
 104 56 しくみてへしに弑逆にあひし  
 104 57 を、時と處とそきて、終にかへり、  
 104 58 朱さか野の八条に庵を結び  
 104 59 て行いすませり。後に六孫王  
 104 60 の廂所とたてしかば、尼寺と云  
 104 61 名今につたへたり。社僧真言  
 104 62 にて、婦人たるもの以外を  
 104 63 かぎりとす。尼將軍の好色に

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

104 64 ふかき、俗間に色気ちがいといふは是也。  
 104 65 北条の代々、時泰時より等実に似て  
 104 66 つたなく、太平なくす。ついに、高時にいたりて  
 104 67 亡ぶは、九代の冥福のみ。後だい  
 104 68 の内謀あらわれし冷泉何かし  
 104 69 とのをかまくらに捕へて事問ふ。  
 104 70 哥よまれたり。「おもひきや我しき島の  
 104 71 道ならでうき世の事をとるべしとは」  
 105 72 高時感伏していかしたり。この哥  
 105 73 何ご、ろぞや。□□は哥によりて官位  
 105 74 を申也。我しき島の道さらずは聞へず。  
 105 75 又「うき世の事」とはいかに。朝臣の  
 105 76 朝政をとる、をや、僧人ならばしか  
 105 77 よむべし。高時の暗愚、天下を  
 105 78 失ふべし。哥は堂上の事とし  
 105 79 て

注5、たとえば謡曲・船弁慶の末尾は「跡白波とぞなりにける」である。  
 注6、ただ、従来の翻字で時折「ハ」「ミ」などを残す例を見かけるが、今回の  
 調査によつてそうした処理はほとんど意味をなさないことがあきらかに  
 なつたと思う。今の例でも、「み」と「ミ」の間に用法上の差はあまりない  
 のである。同様に、「ハ」も、秋成はたしかに語頭に使うという事はほと  
 んどないわけだが、それを区別するなら、ほとんど助詞の「はば」にしか  
 使われない「盤」をどうして区別しないのか、ということになる。その他に  
 ももっと使い分け意識の明瞭な仮名字母は存在しており、「ミ」と「ハ」だ  
 けを特に区別しなければならぬという根拠は存在しないと思われる。

## 付記

一、本文二九頁(128頁)下段でふれた「寛政イ文化頃刊行の万葉研究書の序文」というのは、その後の調査で加藤千蔭の『万葉集略解』(寛政12年成立、文化9年刊本による)の自跋であることが判明した。これを見ると、わずか五行の短いものであるにもかかわらず、

すべて春倍て

あまた、びあまた、備

十日まで十日万泥

など、比較的めずらしい字母を認めることができる。「備」「泥」などが秋成と共通することからすれば、これら万葉仮名に由来する字母はこの期の国学者にある程度一般化していた用字法なのかもしれない。

二、たまたま講読のテキストとして使用していた桜楓社版『源氏物語・下』(底本は寛文十三年刊の首書源氏物語)の東屋の巻のなかに「五づせんだん(牛頭栴檀)」という例を発見した。校訂者はこの「五」を仮名と断定することをためらったためそのまま残したものと思われるが、その処置のおかげで秋成の用いた字母「五」に先例のあることが確かめられたわけである。

三、内田保廣氏より馬琴の字母意識に関して次のような記事があるという旨の教示を得た。出てくるのは『朝夷巡島記』第二集の序文・口絵の跡に続く作者の言葉のところである。

・・・「あ」「え」を「へ」とし、「ひ」「ぬ」を「い」とし、「志」もじを「し」とし、「者」「盤」を「ハ」とす。(割注)「よろづをよろずとするの類亦多し」「志」「し」は義において違はざれども、「志」は上におくの仮名。「し」は下につくの仮名なり。「者」「ハ」も亦これに同じ：

これによれば、馬琴は同じ仮名をあらわす文字であっても「し・志」あるいは「者・盤・ハ」などは語における位置によって区別すべきだという意識

を持っていたらしいことがうかがえる。「志」を「上におく」仮名とすることは58頁下段でもとりあげたようにかなり一般性のある用法であり、「へは」の仮名についても各人がなんらかの規範意識を持っていたらしいことはすでに述べたとおりである。

明確に意識化されているかいないかの違いはあるにしても、同じ仮名をあらわす複数の字母が全く等価と考えられていなかったことは確実と思われる。

表1 稿本別字母数一覧

字母	富岡合計	卷子合計	冊子合計	佐藤合計	総計	字母	富岡合計	卷子合計	佐藤合計	総計	
あ	217	69	151	128	565	ぬ	99	27	66	42	234
ア	94	19	54	33	200	ね	35	10	19	24	88
い	252	119	279	105	755	年	11	5	11	10	37
う	112	41	129	59	341	の	855	315	815	493	2,478
え	32	7	22	17	78	能	30	15	16	16	77
エ	1	0	0	0	1	は	61	35	149	35	280
お	156	44	110	75	385	ハ	362	133	212	205	913
か	157	54	163	78	452	盤	227	71	207	124	629
可	538	239	460	317	1,554	者	107	45	62	82	296
賀	1	0	6	0	7	ひ	266	106	281	155	808
迎	2	1	1	0	4	飛	19	5	0	2	26
迦	0	1	0	0	1	日	6	2	6	0	14
開	0	1	0	0	1	備	0	2	0	0	2
き	328	90	109	186	713	悲	2	0	1	1	4
支	37	19	191	5	252	ふ	211	87	200	129	627
起	4	0	2	0	6	布	16	2	1	3	22
伎	2	0	0	1	3	婦	0	1	0	0	1
疑	0	1	0	0	1	へ	331	142	296	150	919
く	353	143	278	184	958	邊	0	0	1	0	1
九	5	3	6	0	14	遍	1	0	0	0	1
具	2	0	2	0	4	ほ	79	24	59	47	209
け	68	29	107	44	248	本	22	4	5	11	42
个	64	25	29	43	161	ま	165	71	286	149	671
希	11	5	2	11	29	万	180	55	66	35	336
遣	5	0	3	3	11	滿	24	3	8	14	49
こ	250	82	179	135	646	麻	0	1	0	0	1
古	28	3	8	3	42	み	78	30	100	41	249
五	1	0	1	1	3	ミ	82	32	61	40	215
さ	273	71	217	163	724	む	85	34	65	49	233
佐	35	10	45	7	97	無	7	4	11	3	25
し	803	309	712	417	2,241	め	163	63	168	117	511
志	67	25	52	44	188	免	6	1	0	2	9
自	1	0	0	0	1	も	282	129	247	178	836
す	183	65	118	112	478	茂	1	0	0	0	1
春	94	30	80	69	273	や	138	34	147	71	390
須	14	4	29	3	50	屋	0	0	1	0	1
せ	239	72	192	112	615	夜	1	0	0	0	1
勢	4	1	2	1	8	ゆ	64	19	46	30	159
そ	167	37	136	87	427	遊	1	0	0	0	1
た	32	10	15	9	66	よ	265	134	198	138	735
多	688	278	704	329	1,999	ら	434	120	352	260	1,166
堂	8	4	3	0	15	羅	2	0	0	0	2
當	0	1	0	0	1	り	499	216	530	244	1,489
駝	0	0	0	1	1	里	65	28	38	25	156
ち	61	31	73	28	193	理	4	2	2	0	8
地	2	0	1	0	3	る	352	127	256	211	946
治	0	0	1	0	1	流	26	7	14	12	59
つ	287	108	288	151	834	類	21	7	4	5	37
徒	19	7	11	8	45	れ	180	66	190	91	527
津	5	3	0	0	8	連	97	24	22	63	206
て	967	366	805	356	2,494	ろ	83	19	62	30	194
泥	4	1	1	0	6	路	6	0	2	0	8
傳	2	1	0	0	3	わ	49	23	57	21	150
豆	1	0	0	0	1	王	23	15	11	26	75
帝	0	1	0	0	1	る	15	5	26	8	54
帝	1	0	0	0	1	井	0	1	0	0	1
轉	1	0	0	0	1	ゑ	2	2	2	1	7
と	891	333	719	385	2,328	衛	2	1	2	2	7
刀	8	6	28	0	42	を	281	95	231	243	850
登	15	3	3	0	21	乎	14	4	97	0	115
東	0	0	1	0	1	越	7	3	1	2	13
杼	0	0	1	0	1	ん	147	68	127	74	416
な	272	131	233	168	804	仮名合計	15,286	5,724	13,346	8,070	42,426
那	7	5	18	3	33	総字数	21,724	7,986	19,119	11,598	60,427
に	112	30	119	45	306	総行数	1,348	535	1,109	766	3,758
ニ	0	2	11	0	13	使用字母種	115	105	106	90	129
爾	531	259	477	378	1,645						
耳	166	44	103	50	363						
丹	16	8	19	1	44						

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

表2 富岡本字母数一覧

字 母	富岡序文	富岡血か	富岡天津	富岡海賊	富岡目ひ	富岡焚喰	富岡合計
あ	2	26	32	40	31	86	217
阿	0	15	8	14	13	44	94
い	5	45	33	32	32	105	252
う	2	23	19	14	10	44	112
え	0	8	6	6	2	10	32
エ	0	0	0	1	0	0	1
お	3	35	24	14	22	58	156
か	3	28	23	19	28	56	157
可	8	100	84	90	62	194	538
賀	0	1	0	0	0	0	1
迦	0	0	2	0	0	0	2
閑	0	0	0	0	0	0	0
き	2	46	48	47	47	138	328
支	0	4	5	8	6	14	37
起	0	1	1	1	0	1	4
伎	0	0	0	1	0	1	2
疑	0	0	0	0	0	0	0
く	2	55	44	56	49	147	353
九	0	0	0	1	0	4	5
具	0	2	0	0	0	0	2
け	2	14	8	11	10	23	68
个	0	15	16	6	7	20	64
希	0	5	0	0	2	4	11
遣	0	2	0	1	0	2	5
こ	1	40	38	22	22	127	250
古	0	5	5	7	4	7	28
五	0	1	0	0	0	0	1
さ	4	55	64	32	35	83	273
佐	1	7	5	5	4	13	35
し	7	151	151	129	85	280	803
志	2	16	15	11	5	18	67
自	0	1	0	0	0	0	1
す	2	40	25	16	34	66	183
春	0	14	12	15	14	39	94
須	0	3	1	3	3	4	14
せ	0	83	56	18	13	69	239
勢	0	3	1	0	0	0	4
そ	0	34	27	37	13	56	167
た	0	7	3	7	1	14	32
多	7	152	110	73	90	256	688
堂	0	0	1	3	1	3	8
當	0	0	0	0	0	0	0
駝	0	0	0	0	0	0	0
ち	0	14	6	6	7	28	61
地	0	1	0	1	0	0	2
治	0	0	0	0	0	0	0
つ	5	45	44	41	42	110	287
徒	0	5	10	6	1	6	19
津	0	1	1	0	1	2	5
て	4	140	122	112	115	474	967
泥	0	1	0	1	2	0	4
傳	0	1	0	0	1	0	2
豆	0	0	0	0	1	0	1
帝	0	0	0	0	0	0	0
轉	0	0	0	0	0	1	1
と	7	147	117	117	109	394	891
刀	0	1	0	1	1	5	8
登	1	3	1	3	3	4	15
東	0	0	0	0	0	0	0
杵	0	0	0	0	0	0	0

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について



上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

字母	富岡序文	富岡血か	富岡天津	富岡海賊	富岡目ひ	富岡樊噲	富岡合計
な	1	47	51	50	31	92	272
那	0	3	1	0	0	3	7
に	19	10	14	20	49	112	112
ニ	0	0	0	0	0	0	0
爾	3	91	79	77	57	224	531
耳	1	35	34	34	23	39	166
丹	0	1	2	5	0	8	16
ぬ	0	13	17	14	7	48	99
ね	1	6	5	5	8	10	35
年	0	1	1	3	1	5	11
の	5	162	162	140	107	279	855
能	0	7	3	12	4	4	30
は	0	17	10	3	8	23	61
ハ	3	58	52	78	56	115	362
盤	2	40	32	36	20	97	227
者	2	22	13	15	11	44	107
ひ	2	50	52	28	33	101	266
飛	1	6	1	4	4	3	19
日	0	2	0	1	2	1	6
備	0	0	0	0	0	0	0
悲	0	1	0	0	1	0	2
ふ	2	43	29	29	19	89	211
布	2	3	0	0	4	7	16
婦	0	0	0	0	0	0	0
へ	0	55	51	51	31	143	331
邊	0	0	0	0	0	0	0
遍	0	0	0	0	0	1	1
ほ	0	21	13	5	9	31	79
本	0	5	2	3	2	10	22
ま	1	50	33	17	19	45	165
万	1	52	39	22	23	43	180
満	0	10	3	5	3	3	24
麻	0	0	0	0	0	0	0
み	0	21	15	10	10	22	78
ミ	1	21	12	15	7	26	82
む	2	12	11	12	11	37	85
無	0	1	1	2	1	2	7
め	3	25	38	19	22	56	163
免	0	2	0	3	1	0	6
も	5	39	36	49	35	118	282
茂	0	0	0	0	1	0	1
や	1	21	19	14	25	58	138
屋	0	0	0	0	0	0	0
夜	0	0	0	0	1	0	1
ゆ	0	8	5	11	8	32	64
遊	0	0	0	1	0	0	1
よ	2	33	36	45	32	117	265
ら	2	90	60	80	55	147	434
羅	0	1	0	1	0	0	2
り	3	85	88	60	61	202	499
里	1	18	13	9	8	16	65
理	1	0	0	0	1	2	4
る	2	40	43	62	55	150	352
流	1	8	3	8	2	4	26
類	1	5	2	6	3	4	21
れ	6	20	24	29	21	80	180
連	0	9	12	18	18	40	97
ろ	1	12	10	7	12	41	83
路	0	1	1	1	1	2	6

字 母	富岡序文	富岡血か	富岡天津	富岡海賊	富岡目ひ	富岡樊噲	富岡合計
わ	0	7	4	5	10	23	49
王	0	4	1	1	4	13	23
ゐ	0	4	3	1	1	6	15
井	0	0	0	0	0	0	0
ゑ	0	2	0	0	0	0	2
衛	0	0	0	0	1	1	2
を	2	60	65	45	22	87	281
乎	1	2	1	7	1	2	14
越	0	2	1	2	1	1	7
ん	1	27	19	14	22	64	147
仮名総数	133	2,796	2,377	2,216	1,884	5,880	15,286
文字総数	170	4,123	3,442	3,502	2,596	8,062	21,725
総行数	11	238	215	233	151	500	1,348
字母種	52	101	87	94	95	96	115

表3 卷子本字母数一覧

字 母	卷子二世	卷子死首	卷子捨石	卷子宮木	卷子歌の	卷子樊噲	卷子妖尼	卷子合計
あ	1	0	8	37	2	3	18	69
阿	1	0	1	10	6	1	0	19
い	7	3	11	68	8	2	20	119
う	0	0	7	21	3	1	9	41
え	1	0	0	6	0	0	0	7
エ	0	0	0	0	0	0	0	0
お	2	1	6	24	5	2	4	44
か	4	1	7	35	4	0	3	54
可	4	6	24	156	17	2	30	239
賀	0	0	0	0	0	0	0	0
迦	0	0	0	1	0	0	0	1
閑	0	0	0	0	1	0	0	1
き	1	1	9	59	4	0	16	90
支	3	1	0	12	2	1	0	19
起	0	0	0	0	0	0	0	0
伎	0	0	0	0	0	0	0	0
疑	0	0	0	1	0	0	0	1
く	7	2	14	95	5	3	17	143
九	0	0	0	3	0	0	0	3
具	0	0	0	0	0	0	0	0
け	4	0	0	19	4	0	2	29
个	4	1	2	22	0	0	0	25
希	0	0	2	2	0	1	0	5
遣	0	0	0	0	0	0	0	0
こ	3	2	10	50	4	3	10	82
古	2	0	0	1	0	0	0	3
五	0	0	0	0	0	0	0	0
さ	2	0	8	43	4	2	12	71
佐	1	0	0	8	1	0	0	10
し	19	5	24	189	25	4	43	309
志	1	0	3	19	1	1	0	25
自	0	0	0	0	0	0	0	0
す	3	1	10	32	5	1	13	65
春	2	1	3	16	3	0	5	30
須	1	0	1	2	0	0	0	4
せ	2	1	7	44	9	0	9	72
勢	0	0	0	1	0	0	0	1
そ	0	2	3	27	0	1	4	37

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

字母	卷子二世	卷子死首	卷子捨石	卷子歌の	卷子樊噲	卷子妖尼	卷子合計	
た	0	0	2	4	3	0	1	10
多	6	9	40	163	27	4	29	278
堂	0	0	0	4	0	0	0	4
當	0	0	0	1	0	0	0	1
駝	0	0	0	0	0	0	0	0
ち	1	0	5	19	3	0	3	31
地	0	0	0	0	0	0	0	0
治	0	0	0	0	0	0	0	0
つ	6	3	10	62	10	1	16	108
徒	0	0	1	4	1	1	0	7
津	0	0	0	2	0	1	0	3
て	11	11	39	222	16	10	57	366
泥	0	0	0	1	0	0	0	1
傳	0	0	0	0	1	0	0	1
豆	0	0	0	0	0	0	0	0
帝	0	0	0	0	0	1	0	1
轉	0	0	0	0	0	0	0	0
と	17	11	39	192	13	8	53	333
刀	2	0	0	4	0	0	0	6
登	0	0	0	3	0	0	0	3
東	0	0	0	0	0	0	0	0
杵	0	0	0	0	0	0	0	0
な	8	4	17	79	7	1	15	131
那	0	0	1	3	1	0	0	5
に	1	1	5	16	4	1	2	30
ニ	0	0	0	2	0	0	0	2
爾	10	4	25	135	16	7	62	259
耳	1	1	6	25	6	1	4	44
丹	0	0	0	6	2	0	0	8
ぬ	1	1	6	15	1	1	2	27
ね	1	0	2	6	1	0	0	10
年	0	0	0	3	0	0	2	5
の	13	3	24	188	39	5	43	315
能	0	0	3	8	2	2	0	15
は	6	0	5	18	0	0	6	35
ハ	1	3	14	75	11	3	26	133
盤	8	1	10	45	4	1	1	71
者	2	0	7	28	2	0	7	45
ひ	3	1	12	71	8	1	10	106
飛	0	0	1	4	0	0	0	5
日	0	0	0	2	0	0	0	2
備	0	0	0	2	0	0	0	2
悲	0	0	0	0	0	0	0	0
ふ	3	3	10	53	6	0	12	87
布	0	0	0	1	0	1	0	2
婦	0	0	0	1	0	0	0	1
へ	0	4	14	96	12	3	13	142
邊	0	0	0	0	0	0	0	0
遍	0	0	0	0	0	0	0	0
ほ	0	0	0	20	3	0	1	24
本	0	0	1	1	2	0	0	4
ま	3	0	10	42	6	0	10	71
万	2	0	8	37	7	0	1	55
満	0	0	0	2	1	0	0	3
麻	0	0	0	1	0	0	0	1
み	1	0	1	16	8	0	4	30
ミ	0	0	1	22	4	0	5	32
む	3	0	1	21	2	0	7	34
無	1	0	1	1	1	0	0	4

字母	卷子二世	卷子死首	卷子捨石	卷子歌の	卷子樊噲	卷子妖尼	卷子合計	
め	1	2	2	49	3	1	5	63
免	0	0	0	1	0	0	0	1
も	12	5	19	72	3	1	17	129
茂	0	0	0	0	0	0	0	0
や	3	1	3	22	1	0	4	34
屋	0	0	0	0	0	0	0	0
夜	0	0	0	0	0	0	0	0
ゆ	0	2	2	10	1	3	1	19
遊	0	0	0	0	0	0	0	0
よ	8	3	12	85	10	3	13	134
ら	3	2	10	82	5	3	15	120
羅	0	0	0	0	0	0	0	0
り	13	7	23	117	6	3	47	216
里	0	1	5	19	1	1	1	28
理	0	0	0	2	0	0	0	2
る	3	0	15	76	14	3	16	127
流	0	0	1	5	1	0	0	7
類	0	0	1	6	0	0	0	7
れ	5	4	15	28	4	2	8	66
連	0	1	8	14	0	0	1	24
ろ	1	1	3	6	2	2	4	19
路	0	0	0	0	0	0	0	0
わ	0	0	7	12	4	0	0	23
王	0	0	0	8	3	0	4	15
る	0	0	0	5	0	0	0	5
井	0	0	0	1	0	0	0	1
ゑ	0	0	0	2	0	0	0	2
衛	1	0	0	0	0	0	0	1
を	0	0	6	61	4	1	23	95
乎	2	0	0	1	1	0	0	4
越	0	0	1	1	1	0	0	3
ん	1	0	7	46	4	1	9	68
仮名総数	235	117	621	3,460	411	105	775	5,724
総字数	316	163	856	4,755	598	154	1,144	7,986
総行数	20	14	61	312	40	10	79	535
字母種	57	40	69	101	71	46	58	105

表4 冊子本字数一覧

字母	序文	血か	天津	海賊	二世	目ひ	捨石	宮木	樊噲	妖尼	楠公	合計
あ	0	26	19	10	3	34	15	10	10	12	12	151
阿	0	5	5	2	3	11	2	5	5	5	11	54
い	5	48	19	16	11	37	23	31	27	18	44	279
う	2	20	21	12	2	10	13	14	10	2	23	129
え	0	8	3	1	0	2	3	2	0	1	2	22
エ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
お	3	22	9	6	4	20	9	12	11	4	10	110
か	1	32	18	7	1	31	11	15	25	12	10	163
可	3	82	63	18	5	62	34	57	52	27	57	460
賀	0	3	2	0	0	0	0	1	0	0	0	6
迦	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
閑	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
き	0	25	17	7	1	13	3	15	6	8	14	109
支	3	31	26	11	1	42	19	22	23	5	8	191
起	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
伎	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
疑	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

字母	序文	血か	天津	海賊	二世	目ひ	捨石	宮木	樊噲	妖尼	楠公	合計
く	0	48	37	11	6	37	20	25	40	27	27	278
九	0	1	0	0	0	0	0	2	0	3	0	6
具	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	2
け	1	16	10	2	0	21	13	9	15	5	15	107
个	0	6	4	0	0	3	3	6	3	2	2	29
希	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2
遣	0	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	3
こ	1	35	26	7	5	26	9	18	30	7	15	179
古	0	1	1	2	0	0	0	0	3	0	1	8
五	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
さ	2	47	43	4	6	26	14	21	20	6	28	217
佐	1	9	6	0	1	9	4	3	5	2	5	45
し	6	131	113	28	18	91	52	75	70	58	70	712
志	2	11	6	5	0	4	3	9	7	2	3	52
自	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
す	1	28	4	5	1	20	15	12	7	15	10	118
春	1	18	10	3	3	12	4	3	8	12	6	80
須	0	5	3	4	0	9	5	2	0	1	0	29
せ	1	63	53	0	1	10	10	16	16	13	9	192
勢	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
そ	0	32	15	9	3	18	12	9	15	6	17	136
た	0	2	2	0	0	3	2	0	4	0	2	15
多	5	157	97	41	9	97	56	58	71	44	69	704
堂	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	3
當	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
駝	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ち	0	14	6	5	0	8	8	6	18	3	5	73
地	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
治	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
つ	3	53	36	12	7	48	27	18	29	17	38	288
徒	1	0	3	0	0	3	1	1	0	1	1	11
津	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
て	4	125	103	43	15	123	73	68	102	66	83	805
泥	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
傳	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
豆	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
帝	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
轉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
と	6	108	79	41	17	112	62	67	86	64	77	719
刀	0	12	3	1	0	2	4	5	0	0	1	28
登	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	3
東	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
籽	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
な	3	40	26	8	2	30	24	34	28	12	26	233
那	0	4	4	0	0	4	2	1	1	1	1	18
に	1	18	21	8	2	13	7	10	12	13	14	119
二	0	7	1	1	0	0	0	0	0	1	1	11
爾	1	88	63	16	13	76	44	38	48	46	44	477
耳	0	26	21	7	0	7	9	11	10	5	7	103
丹	0	1	1	0	0	6	3	3	1	1	3	19
ぬ	0	14	11	3	2	5	8	8	10	2	3	66
ね	0	3	3	0	1	5	0	1	1	1	4	19
年	0	5	0	1	0	1	0	1	1	0	2	11
の	6	164	125	24	22	123	43	90	67	64	87	815
能	1	1	4	2	0	2	1	3	0	0	2	16
は	2	26	15	3	3	30	12	13	17	9	19	149
ハ	0	56	41	8	4	27	8	18	9	15	26	212
盤	2	28	21	11	4	32	24	21	32	10	22	207
者	2	7	4	4	2	11	8	6	5	4	9	62

字母	序文	血か	天津	海賊	二世	目ひ	捨石	宮木	樊噲	妖尼	楠公	合計
ひ	2	54	33	18	11	44	30	35	21	17	16	281
飛	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
日	0	2	1	0	0	0	0	0	1	0	2	6
備	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
悲	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ふ	5	29	29	9	5	28	19	24	22	7	23	200
布	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
婦	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
へ	3	69	53	12	2	19	25	21	45	22	25	296
邊	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
遍	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ほ	0	16	7	1	2	11	0	4	10	3	5	59
本	0	2	0	0	0	1	0	2	0	0	0	5
ま	1	95	48	6	6	39	15	25	19	15	17	286
万	1	26	21	2	0	3	10	0	0	1	2	66
満	0	0	0	1	0	1	0	2	2	0	2	8
麻	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
み	1	20	13	3	2	16	5	18	9	6	7	100
ミ	0	13	16	3	1	5	1	6	8	3	5	61
む	0	9	4	2	4	11	4	9	9	10	3	65
無	0	1	3	1	2	1	1	0	0	1	1	11
め	1	23	29	5	4	23	12	30	20	10	11	168
免	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
も	5	32	35	7	9	27	13	39	34	29	18	247
茂	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
や	1	21	14	12	2	26	12	15	20	7	17	147
屋	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
夜	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ゆ	0	8	2	2	3	7	2	7	7	5	3	46
遊	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
よ	2	28	31	12	9	32	9	27	22	6	20	198
ら	1	77	47	25	3	65	22	30	34	16	32	352
羅	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
り	3	104	70	33	8	81	46	50	57	38	40	530
里	2	3	1	1	0	1	5	6	5	2	12	38
理	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2
る	4	33	16	13	3	54	21	29	38	14	31	256
流	0	0	1	0	0	2	1	2	3	1	4	14
類	0	1	0	0	0	0	0	0	1	2	0	4
れ	3	24	20	9	1	37	18	20	20	15	23	190
連	0	1	1	0	1	5	6	2	3	0	3	22
ろ	1	10	4	6	3	18	5	4	6	3	2	62
路	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
わ	0	8	7	0	0	15	3	6	9	6	3	57
壬	0	0	1	0	0	3	2	2	0	0	3	11
る	0	12	4	0	0	4	0	1	3	1	1	26
井	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ゑ	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	2
衛	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
を	3	36	35	5	3	25	14	14	17	40	39	231
乎	0	26	15	7	0	9	9	6	9	9	7	97
越	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
ん	1	24	7	9	0	25	18	11	9	5	18	127
仮名総数	110	2,530	1,799	614	263	1,959	1,050	1,325	1,426	927	1,343	13,346
文字総数	130	3,629	2,697	1,174	376	2,652	1,471	1,689	1,940	1,509	1,851	19,119
総行数	7	203	165	73	25	161	85	100	102	88	100	1,109
字母種	47	91	82	66	54	81	71	78	74	74	81	106

表5 佐藤本字母数一覧

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

字母	佐藤血か	佐藤天津	佐藤目ひ	佐藤拾石	佐藤合計	字母	佐藤血か	佐藤天津	佐藤目ひ	佐藤拾石	佐藤合計
あ	23	19	79	7	128	ぬ	9	10	19	4	42
ア	4	3	25	1	33	ね	3	3	18	0	24
い	22	9	70	4	105	年	1	2	6	1	10
う	11	5	42	1	59	の	102	54	316	21	493
え	2	1	13	1	17	能	4	3	9	0	16
エ	0	0	0	0	0	は	9	8	17	1	35
お	18	14	41	2	75	ハ	31	22	147	6	206
か	15	12	51	0	78	盤	20	11	88	5	124
可	61	31	212	13	317	者	21	7	51	3	82
賀	0	0	0	0	0	ひ	41	19	83	12	155
迦	0	0	0	0	0	飛	2	0	0	0	2
閑	0	0	0	0	0	日	0	0	0	0	0
き	32	14	129	11	186	備	0	0	0	0	0
支	3	0	2	0	5	悲	0	0	1	0	0
起	0	0	0	0	0	ふ	25	13	78	13	129
伎	1	0	0	0	1	布	2	0	1	0	3
疑	0	0	0	0	0	婦	0	0	0	0	0
く	40	22	109	13	184	へ	29	12	102	7	150
九	0	0	0	0	0	邊	0	0	0	0	0
具	0	0	0	0	0	遍	0	0	0	0	0
け	14	11	17	2	44	ほ	12	10	24	1	47
个	6	8	26	3	43	本	4	3	4	0	11
希	3	0	8	0	11	ま	44	18	78	9	149
遣	1	0	2	0	3	万	15	10	10	0	35
こ	20	19	89	7	135	満	1	5	8	0	14
古	2	1	0	0	3	麻	0	0	0	0	0
五	0	0	1	0	1	み	7	7	26	1	41
さ	30	25	100	8	163	ミ	6	3	27	4	40
佐	2	3	2	0	7	む	7	3	35	4	49
し	86	52	264	15	417	無	2	1	0	0	3
志	5	13	26	0	44	め	29	16	70	2	117
自	0	0	0	0	0	免	1	0	1	0	2
す	33	4	71	4	112	も	21	13	137	7	178
春	10	4	54	1	69	茂	0	0	0	0	0
須	1	0	2	0	3	や	12	4	52	3	71
せ	37	21	51	3	112	屋	0	0	0	0	0
勢	0	1	0	0	1	夜	0	0	0	0	0
そ	19	15	52	1	87	ゆ	5	2	21	2	30
た	2	5	2	0	9	遊	0	0	0	0	0
多	72	33	212	12	329	よ	19	14	98	7	138
堂	0	0	0	0	0	ら	61	25	169	5	260
當	0	0	0	0	0	羅	0	0	0	0	0
駝	0	0	1	0	1	り	56	37	135	16	244
ち	5	1	21	1	28	里	7	4	12	2	25
地	0	0	0	0	0	理	0	0	0	0	0
治	0	0	0	0	0	る	36	16	152	7	211
つ	18	15	114	4	151	流	3	1	8	0	12
徒	2	1	5	0	8	類	2	2	1	0	5
津	0	0	0	0	0	れ	14	11	63	3	91
て	74	34	221	27	356	連	7	6	47	3	63
泥	0	0	0	0	0	ろ	2	3	23	2	30
傳	0	0	0	0	0	路	0	0	0	0	0
豆	0	0	0	0	0	わ	5	2	13	1	21
帝	0	0	0	0	0	王	2	0	22	2	26
轉	0	0	0	0	0	ろ	2	1	5	0	8
と	64	40	253	28	385	井	0	0	0	0	0
刀	0	0	0	0	0	ゑ	0	0	1	0	1
登	0	0	0	0	0	衛	0	0	2	0	2
東	0	0	0	0	0	を	63	21	153	6	243
杵	0	0	0	0	0	乎	0	0	0	0	0
な	42	21	96	9	168	越	1	0	1	0	2
那	0	1	2	0	3	ん	14	6	49	5	74
に	12	5	26	2	45	仮名総数	1,621	913	5,169	367	8,070
ニ	0	0	0	0	0	文字総数	2,500	1,239	7,344	515	11,598
爾	63	26	269	20	378	総行数	170	101	459	36	766
耳	7	15	26	2	50	字母種	82	75	84	58	90
丹	0	1	0	0	1						

表6 古典作品等使用字母対照一覧

字母	春雨	古筆	万葉仮名	南畝1	版本	土佐日記	和泉式部	更級日記	平仲物語	源氏桐壺	篁物語	徒然草	世阿弥
あ	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
ア	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	○	×	×
い	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
伊	×	○	○	×	×	×	×	○	○	○	×	×	×
う	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
え	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
江	×	○	×	○	×	○	×	○	○	×	×	×	×
盈	×	○	×	×	×	×	○	×	×	×	○	○	×
お	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
か	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
可	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
賀	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
迦	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
閉	○	○	○	×	○	×	○	×	○	○	×	×	×
き	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
起	○	○	×	○	◎	×	○	○	×	○	○	○	○
支	○	○	○	○	◎	○	○	○	×	○	○	×	×
伎	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
喜	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×
疑	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
木	×	○	○	×	×	○	×	○	×	×	×	×	×
く	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
具	○	○	○	○	◎	×	×	○	○	×	○	○	×
九	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
俱	×	○	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×
け	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
个	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	×
希	○	○	×	○	◎	×	○	×	×	○	○	○	×
遣	○	○	×	×	○	×	○	○	○	×	○	○	×
気	×	○	○	×	○	×	○	×	○	×	×	×	×
こ	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
古	○	○	○	○	◎	×	○	○	○	○	○	○	○
五	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
期	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×
さ	○	○	○	○	◎	×	○	○	○	○	○	○	○
佐	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	×
散	×	○	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×
し	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
志	○	○	○	○	◎	×	○	○	○	○	○	○	○
自	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
新	×	○	○	×	×	×	×	○	○	×	○	×	×
す	○	○	○	○	◎	×	○	○	○	○	○	○	○
春	○	○	×	○	◎	×	○	×	○	○	○	○	○
須	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	×
数	×	○	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×
寿	×	○	×	×	×	×	○	×	○	×	×	×	×
せ	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
勢	○	○	○	○	◎	×	○	×	○	○	○	×	×
そ	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
楚	×	○	○	×	○	×	○	×	×	×	○	×	○
所	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×
た	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
多	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
堂	○	○	×	○	◎	×	×	○	○	○	○	○	○
當	○	○	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×
駝	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
ち	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
地	○	○	○	×	○	×	○	○	×	○	○	○	×
治	○	×	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×
遅	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について



上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

字母	春雨	古筆	万葉仮名	南畝1	版本	土佐日記	和泉式部	更級日記	平仲物語	源氏桐壺	篁物語	徒然草	世阿弥
つ	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
徒	○	○	○	○	◎	×	○	○	×	○	○	○	○
津	○	○	○	○	○	×	○	×	×	○	○	×	×
都	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×
て	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
帝	○	○	○	×	○	×	○	○	×	○	○	×	×
三	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
傳	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
轉	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
泥	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
亭	○	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×
と	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
登	○	○	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	×
刀	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×
東	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
杵	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
与	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×
な	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
那	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
に	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
爾	○	○	○	○	◎	×	○	×	○	○	○	○	×
耳	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○
二	○	○	○	○	×	○	×	○	○	×	×	○	○
丹	○	○	○	×	○	×	○	×	×	○	○	×	○
ぬ	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
怒	×	○	○	×	○	×	×	×	×	×	○	×	×
努	×	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×
ね	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
年	○	○	○	○	◎	×	○	×	○	○	○	○	○
の	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
能	×	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
農	×	○	×	×	×	×	○	×	×	○	○	○	×
野	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
は	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×
八	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
者	○	○	×	○	◎	×	○	○	○	○	○	○	○
盤	○	○	○	○	◎	×	○	×	○	○	○	○	×
半	×	○	○	×	×	×	○	×	×	×	○	×	×
葉	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
ひ	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
飛	○	○	○	○	◎	×	×	○	○	×	○	○	×
日	○	○	○	×	×	×	○	×	○	×	○	○	×
悲	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
備	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
妣	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
ふ	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
布	○	○	○	×	○	×	○	○	○	○	○	○	×
婦	○	○	×	○	×	×	○	○	○	○	○	○	×
へ	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
遍	○	○	○	○	◎	×	○	×	×	○	×	○	○
邊	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×
ほ	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
本	○	○	○	○	◎	×	○	○	○	○	○	○	○
ま	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
満	○	○	○	○	◎	×	○	○	○	○	○	○	○
万	○	○	○	×	○	×	○	○	○	○	○	○	○
麻	○	○	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×
間	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

字母	春雨	古筆	万葉仮名	南畝1	版本	土佐日記	和泉式部	更級日記	平仲物語	源氏桐壺	篁物語	徒然草	世阿弥
み	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
ミ	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
見	×	○	○	×	○	×	○	○	○	○	○	○	×
身	×	○	○	×	×	×	○	×	○	×	×	×	×
む	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
無	○	○	○	×	○	×	○	○	×	○	×	○	○
舞	×	○	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×
め	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
免	○	○	×	○	○	×	○	○	○	○	○	×	○
も	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
茂	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×
母	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×
裳	×	○	○	×	×	×	×	×	×	○	○	○	×
や	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
屋	○	○	○	○	○	×	○	×	×	○	○	○	○
夜	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
ゆ	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
遊	○	○	○	×	○	×	○	×	×	×	○	○	×
よ	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
ら	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
羅	○	○	○	×	○	×	○	×	○	○	○	○	×
り	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
里	○	○	○	○	◎	×	○	○	○	○	○	○	○
理	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
梨	×	○	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×
李	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
る	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
流	○	○	○	○	○	×	○	×	×	○	○	○	○
類	○	○	○	○	○	×	○	×	×	×	○	○	○
累	×	○	×	×	○	×	×	○	○	○	○	○	×
れ	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
連	○	○	○	○	◎	×	○	×	○	○	○	○	○
ろ	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
路	○	○	○	×	○	×	○	×	×	○	○	×	○
露	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
わ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
王	○	○	×	○	◎	×	○	○	○	○	○	○	○
ゐ	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	×	○	○	○
井	○	○	○	×	○	×	○	○	○	×	○	○	×
ゑ	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
衛	○	○	○	○	○	×	×	○	×	×	○	×	×
を	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
越	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○
乎	○	○	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×
ヲ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
ん	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○
字母種	129	153	141	95	105	63	111	93	96	96	115	100	77

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

表7 『ひとつと草』寄稿者使用字母対照表

字母	知篤	真顔	馬蘭亭	源義方	藤原敏	藤原安民	信義	津村正恭	屋代弘賢	上八太郎	石川雅望	南畝2	橘州	米人	美代子	馬琴	糟丘亭	中神守節
あ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ア	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○
い	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
伊	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
う	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
え	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
江	×	×	×	×	×	×	欠	○	○	欠	○	○	欠	○	○	○	○	○
盈	×	×	×	×	×	×	欠	×	×	欠	×	×	欠	×	×	×	×	×
盛	×	×	×	×	×	×	欠	×	○	欠	×	×	欠	×	×	×	×	×
お	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
か	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
可	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
賀	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
週	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
開	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×
き	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
起	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	×	○
支	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
伎	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
喜	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
履	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
木	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
く	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
具	×	×	×	×	○	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×
九	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
俱	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
け	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
个	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
希	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×
遣	×	○	×	×	×	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	○	×
氣	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×
こ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
古	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	×	○
五	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
期	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
さ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
佐	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
散	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
し	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
志	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
自	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
新	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
す	×	×	○	○	○	×	○	○	○	×	○	○	○	○	×	×	×	×
春	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○
須	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
數	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
壽	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
せ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
勢	×	×	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	○	×
そ	○	○	○	×	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
楚	×	×	×	×	×	○	×	○	×	×	×	×	×	○	○	×	○	×
所	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	○	×
た	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	×	○
多	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
堂	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
當	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
駝	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
ち	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
地	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
治	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
運	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
つ	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
徒	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○
津	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
都	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

字母	知篤	真願	馬蘭亭	源義方	藤原俊	藤原安民	信義	津村正恭	屋代弘賢	上八太郎	石川雅望	南畝2	橘州	米人	美代子	馬琴	精丘亭	中神守節
て	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
て	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×
て	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
て	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
て	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
と	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
と	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
と	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
と	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
と	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
な	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
な	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
に	○	○	×	○	○	○	×	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○
に	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○
に	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○
に	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
ぬ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ぬ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
ぬ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
ね	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ね	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
の	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
の	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
の	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
は	×	○	×	○	○	×	×	○	○	×	○	○	×	○	○	○	○	×
は	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
は	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
は	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
は	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
ひ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ひ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
ひ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
ひ	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
ふ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ふ	○	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×
ふ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
へ	×	×	×	×	×	○	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○
へ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
は	○	○	○	×	○	○	欠	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×
は	○	○	×	○	○	○	欠	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○
ま	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ま	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ま	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
ま	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
み	×	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	×	○	×	○	○	○	○
み	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
み	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
み	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
む	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
む	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
む	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
め	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
め	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
も	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
も	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
も	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
も	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について

字母	知篤	真顔	馬蘭亭	源義方	藤原俊	藤原安民	信義	津村正恭	屋代弘賢	上八太郎	石川雅望	南畝2	橋州	米人	美代子	馬琴	精丘亭	中神守節
や	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
屋	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
夜	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
ゆ	○	○	○	○	○	欠	○	○	○	○	○	○	欠	○	○	○	○	○
遊	×	×	×	×	×	欠	×	×	×	×	×	×	欠	×	×	×	×	×
よ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ら	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
羅	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
り	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
里	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
理	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
梨	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
李	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
る	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
流	×	○	×	×	○	○	×	○	○	×	×	×	×	○	○	○	○	×
類	×	○	×	×	○	○	×	○	○	×	×	×	×	○	○	○	○	×
果	×	○	○	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	×
れ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
連	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ろ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
路	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
露	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
わ	○	×	×	○	○	○	×	○	○	×	○	○	○	×	×	○	×	○
王	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	○	×	○
る	欠	○	○	○	○	欠	欠	○	○	欠	○	欠	×	○	欠	○	○	欠
井	×	×	×	×	×	欠	欠	○	×	欠	×	欠	×	×	欠	×	×	×
と	○	○	○	○	欠	欠	欠	○	○	欠	○	欠	欠	×	○	○	○	○
と	×	×	×	×	欠	欠	欠	×	×	欠	×	欠	欠	×	×	×	×	×
と	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
を	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
越	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
乎	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
ヲ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
ん	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
字母	77	77	80	64	74	80	62	81	84	73	68	71	74	76	84	76	76	67

表8 字母「支」冊子本作品別頻度一覧

字 母	序 文	血かたびら	天津処女	海 賊	二世の縁
き	0	25	17	7	1
支	3	31	26	11	1
起	0	0	0	0	0
	3	56	43	18	2
支の割合	100.00%	55.36%	60.47%	61.11%	50.00%

  

字 母	目ひとつの神	捨石丸	宮木が塚	樊 噲	妖尼公	楠公雨夜がたり	合 計
き	13	3	15	6	8	14	109
支	42	19	22	23	5	8	191
起	0	0	2	0	0	0	2
	55	22	39	29	13	22	302
支の割合	76.36%	86.36%	56.41%	79.31%	38.46%	36.36%	63.25%